の中には獨德利も浴つて居た。殊にはお種が心盡しに、葉山が大好物の酢蛸なども、食卓の上に附いて見えたので、夫を食べもせず飲みもせずに、此の儘出て行くのも、お種の手前氣の毒である。宜し早く飲んでそれからの事だと。葉山は即座に氣を變へて、洋服のまゝ食卓に對つたのである。

「良人、お着換なすつてから召し飲れな。」

お種は傍から斯う言つた。

「着換へるも好いが、今夜は褞袍は御免だぜ。」

葉山は頭を掻きながらお種の顏を視た。

「では、飛白のに致しませうか。」

「いゝや。」

「では縞のに……。」

「いゝや、高貴織が好いな。」

「それ御覽なさい。」

「はい。恐れ入りました。」

（十七）

「お若ちやん、ちよいと、電話がかゝつて來たけれど、今手が離されないから……。」

色の淺黑い、眼の凉しい、小意氣な顏をした「しき島」のお女將が、帳場に坐つて居ながら、折柄何か用ありげに奥から出て來た婢を呼びとめて、恁う甲高い聲で言つた。

「へい。」

とお若は元氣よく挨拶して、階子段の横の電話口に立つたが、手早く受話器を耳に當て、例のお極り文句で、

「もし〳〵誰方で御座います。此方はしき島ですが……。」

と叮嚀な言葉で言つた。

「姉さん、私よ……。」

「あら、姫ちやんなの、誰だと思つたら……。」

と、急に黄色い聲になつて莞爾笑つた。

「未だ見えなくつて？」

「誰方がさ。」

お若は舌をペロリと出した。

「あら、實がないわねえ。今朝あんなに頼んで置いたんだのに……。」

「もう早や忘れつちやつたの。年の故でねえ」

「調戯つちや嫌よ……星さんは……。」

「あゝ星さんかい。星さんならもう、とつくの昔から見えてるぢやありませんかね。」

「おやさう。では今すぐ行くわ……。」

「何處へさ。」

「何處へつて……しき島へ……。」

「しき島へ來るよりか、空を見た方が、餘程たしかぢやないの……。」

「あら、自烈たいわねえ。人の氣も知らないでさ……未だなの……。」

「どうだか……。」

「知らない！」

「罪になるわねえ。」

「眞度よ。死んだら祟るわ。覺えて入らつしやい。」

「生きてたらお赤飯が食べたい。蒸して下さい……。」

お若は面白さうに調戯つて居るとき、

「お若ちやん、もう好い加減にしておき。彼の妓が夢中で居るのに可愛さうだから……。」

お女將が恁う笑ひながら注意した。

お若は默つて笑顔になつたが、

「あのねえ。今度は眞面目だけど、實はたつた今入らしつた許りなのさ。それで電話をかけやうと思つてる所へ、姫ちやんの方からかゝつて來たの、だから汽車の綱引でねえ……。」

「眞度！まあ嬉しい。では今すぐ行くわ。左樣なら……。」

「まあ、現金だわねえ……。」

お若は電話をびつしやり切つた。そして帳場の方へ歩いて行つたが、

「何だか莫迦にそは〳〵して居るんですよ。星さんと言つたら、全く彼の妓は眼がありませんねえ。」

とお女將に言つた。

「眞度ねえ。でも對者は調子が好いんだもの、彼の妓の騷ぐのも無理はないのさ。私だつて、もう五つ六つ年でも若けりや、隨分たゞは置かないんだけど……。」

お女將は長煙管で煙草を喫ひながら、恁う串談を言つた。

「今だつて好いぢやありませんか。なんなら忠義立のつもりで、ひとつお取持ちでも……。」

「小當りに當つてみやうかねえ。でもズドンと來たら好い面の皮さ。其の上彼の妓には一生涯恨まれる。おゝ嫌だ。御免〳〵。」

お女將とお若は顔を見合はして、くすぐつたい樣な聲で笑つた。

それからお若は銚子を持つて、小唄まじりに細長い廊下を進んで行つた。それが間もなく左に折れて、小綺麗な中庭を前に控えた、唯在る座敷に身を入れたが、直に擬ひ黑柿の小形の食卓の前に坐つて、

「只今參りますよ。それ迄はお嫌でも、お若さんのお酌で召し飲れな……。」

と、銚子をのべて男の顔を見た。

客と云ふのは、星さん――葉山であつた。

葉山はお若を對手に、ちびり〳〵飲んだ。晩酌の下地があつたので、大分醉心地になつたが、うるんだ眼をお若を注いで、にや〳〵笑ひながら、

「實は姫の字から手紙が來てね。」

「はあ。知つてますよ。」

お若は眼元で笑つて居る。

「誰だい。其の客人と言ふのは……幾何考へても〳〵、生憎俺の覺帳にや、そんな人間は控えてないがね。どうも變だよ。」

「全く變ですわねえ……。」

「變だと云ふのは此方のこつた。お前の方ぢや、何も變ではなからう。」

「ところが、矢張り變だから妙ですよ。」

「變だね。實際變だね。」

「眞度に變ですよ。」

「お若さんが變だと云ふ位ぢや、何しろ普大抵の變ぢやないね。……などと言つて又俺を擔ぐんぢやないか。今度擔いだら承知せんぞ。一生涯しき島の闘は跨がんから……。」

「それなら大丈夫、金の脇差。決して御心配には及びませんよ。」

「ぢや誰だい？それを聞かないうちは、何だか酒も美味くない……。」

「まあ、もすこし御辛棒なさいよ。姫ちやんが來るまで、ねえ……私が今蓋を開けつちやつたら、彼の妓の身上がゼロになるぢやありませんか。」

「成程、底もある話しだね。」

恁んなことを話して居る所へ、

「今晩は……。」

と艶しい聲がして姫松が入つて來た。髪の多いのと光澤のあるのとが此の藝妓の自慢であつた。そして平素島田しか結つたことのないのが、

今夜は何うしたのか女學生風の廂髪に結つて居た。拔ける程色が白いのに、愛くるしい括頤、鈴を張つた樣にぱつちりした眼の左の方に、是が私の財產よと云ひ顏に小豆粒大の泣黑子が附いて居た。此の街で泣黑子とさへ言へば、直ぐに彼の姫松かと頷かるゝ程有名になつて居るのであつた。

「入らつしやい。」

とお若は笑顏で姫松を眤ッと見た。

「姉さん、ひどいわねえ。散々つばら人を麻折めてさ……。」

姫松は一寸お若を瞋める樣な眼附をして言つたが、直ぐに匐る樣に葉山の傍に坐つて、

「眞度にお久し振りだわねえ。用のある時分でもなくつちや、貴郎は來て下さらないのぬえ。實がないわ。」

それでも姫松は、眞から嘻しさうに言つた。

「姫ちやんも其の代り、今夜うんと燥焦して進げると好いわねえ。昨夕預つた物を質にしておいて……。」

お若は姫松に合槌を打つた。

「えゝ。ちやんと此處へ入れて置いたんだから、大丈夫なの……。」

姫松は手でポンと帶の上を輕く叩いたが、其の手で直ぐに銚子を拿つて、

「貴郎、お酌。」

「おい來た！」

葉山はそれをうけて飲んだが、にや〳〵笑ひ乍ら、二人に言ふだけ言はして置かうと云ふ樣な顏で、默つて濟まし込んで居た。

「貴郎、手紙を御覽なすつて……。」

姫松は小間してから恁う葉山に訊いた。

「見たか見ないか、俺が此所に來てるのが、何よりの證憑ぢやないか。

どうせ實のない人間だから、用のある時分でもなけりや、誰が恁んな待合なんかへ來るもんかね。莫迦〳〵しい。」

葉山は皮肉を言つた癖に、小鼻の邊で笑つて居る。

「あら、御挨拶だわねえ。そんなこと仰有るなら、私此の預物を一生出しやしないから、其のお心算で入らつしやいな。宜くつて……。」

姫松も笑ひながらツンとした。

「どうとも勝手におしなさい。後に手が廻つて、黑いお飯が食べたいなら……。」

「おや〳〵。大變になつちやつたわねえ。もう好い加減にして、御前に申し上げたら如何なの。先きから其のことで、非常く御氣色を損じて居るんだから……。」

お若は笑つて、恁う姫松に注意けたが、直つと起つてお銚子の替目を帳場へ取りに行つた。

姫松もつい其の氣になつて――それでも矢張り思はせ振をする樣な風情で、手を帶の間へ入れたが、軈て一封の書簡を取り出して、「葉山誠哉樣」と書いてある表書の處だけを、ちよつと葉山の眼の先へ突き附け、

「何方が書いたのか、お見覺えがなくつて……。」

と、直ぐに又、猫が魚を掻つ去ふ時のやうな手附で、そつと引つ込ました。

「何だい。手紙ぢやないか。そんなものは要らないよ。御免だ〳〵。」

葉山は嫌な顏をして言つた。そして又擔がれたなと思つた。何時かも大事の品があると云ふ振れ込みで、取りに來て見れば夫は差出人のない手紙で、開いて讀むと姫松より戀しき檀那樣へと書いてあつた。そしてお若と二人で手を拍つて笑つたことがあつた――葉山はそれを思ひ出して、今度も大分顏を出さずに居たから、屹度其の謀略で招び出されたのだらう。また男振を下げて了つた、何うかして此の恨みを晴らしてやら

なければと、彼は腹のうちで案を立てゝ居た時、

「今度は神樣に誓つても好いのよ。眞度に預つた手紙なんだから……。」

姫松は眞面目に言つた。

「其の手は食はんよ。此の前も其樣ことを言つて、俺をまんまと欺したじやないか。佛の顏も三度だよ。誰が乘るもんか。」

葉山は平氣で酒を飲んで居る。

「あら、疑り深いわねえ。今度は指切をしても好いのよ……。」

「いゝや。御免だ！」

「では、惜しいけれど、思ひ切つて進げませう。」

姫松は猶も勿體を附けたことを言ひながら、今度は差出人の方を突き出して見せたか、其の儘手紙を葉山の膝に置いて、

「是でも欺したんですか……。」

と、然も大手柄でもした時の樣に、其の美しい顏を緊張させて言つた。

「何だと？驚見柳之助……。」

葉山はちよつと眼を睜つたが、すぐに又平氣になつた。そして口元まで持つて行つた猪口の中を、何か考へる樣な風に眺つと見詰めたが、嘲けりを帶んだ口調で、

「此の人が昨夕來て、お前を聘けたと云ふのかい。」

「えゝ。然うだわ。」

「莫迦な……其樣ことはあるべき道理がない。」

葉山は姫松の言葉を打ち消す樣に言つた。

「でも然うだから仕方がないわ。……論より證據、中を開けて御覽なさいな。眞度か嘘か、すぐ釋るわ。」

「いゝや、迂濶は開けられない。此の前は戀しき檀那樣だつたが、今度は恨めしき檀那樣がばあと出で來るだらう……。」

葉山は恁う串談を言つたが、實は腹の中で種々に迷つて居るのであつ

た。妙に肩上りのした、釣針を並べた樣な筆癖のある手蹟は、正しく鷲見のに違ひはないが、此の手紙の主が恁んな場所へ酒を呑みに來て、姫松を名指して聘ぶなどは、たとひ一夜に海の水が無くなることはあつても、決して有り得る事實ではない。よしんば萬に一つ何かの都合であつたにしても、故意〳〵自分宛の手紙を懷にして來て、夫を姫松に托して行く理由はない。然うすると此の手紙は僞物に相違ない。僞物とすると什うして恁う鷲見の手蹟を上手に眞似たのか、夫が甚だ怪しむべき點である。昨年の春鷲見を連れて來た時、唯だ此の人は鷲見と云ふ理學者だと言つただけで、名前を知らせた覺えもないし、又其の名前が何う云ふ字を書くと云ふことも、勿論饒舌つた覺えはない。それを一年も經つた此の頃に、書體も其の儘、姓名も誤らずに書いてあるなぞは、實に〳〵不思議でならない。假りに他の客から書いて貰つたとしても、待合なんかへ出入する人で、俺の外は鷲見には知己がない筈である。どうも變だ。

謎のやうな手紙である――

葉山は恁う微細な點まで考へを究めたのであつた。そして再び擔がれない樣にと大事をとつたのである。

「隨分しつつこいわねえ。早く開いて御覽なさいな。」

姫松は諄かしさうに身を搖す振りながら、ずつと葉山の方へ一膝乘り出した。

「却々さうはいかない。此の前も其の手でやられた……。」

其所へお若が現はれて、

「什うなすつたの、驚き桃の木でせう……。」

と葉山に對つて言つた。

「所が疑り深くつて、却々開けやしないのよ。」

姫松はお若の顏を見ながら、すこし澁つた調子で言つた。

「まあ、さう……では恁うすると好いわ。其の手紙を開いた上で、葉

山さんが負けたら、姫ちやんにお芝居を驕つて、姫ちやんが負けたら、葉山さんのことなら、以來どんな無理でも承くとしたら……。」

お君は恁う言つて笑つた。

「さう〳〵。それが好いわ。それが好いわ。」

「宜からう。ぢや然うしやう。」

葉山は餘り乘氣のしない聲で言つたが、

「驚見は一人で來たのかい？」

と更に念を推す樣に姫松に訊いた。

「それは什うですか。睹つこが初まつてから、貴郎卑怯ぢやありませんか。」

姫松の言ふべき處をお君が受けて言つた。

「いや、俺も男一疋で金玉が附いてるから、決して逃げる樣な卑怯はしない。唯だ念の爲め聞いただけさ。」

「でもまあ、勝負がついてからにおしなさいよ。」

とお君は笑つた。

「ぢや、開けやう！」

葉山は面倒臭さうに言つたが、直ぐに手紙の封を押し切つた。仲には半紙五枚程、細に書いた、正直正銘の柳之助の手紙が入つて居た。

葉山は眼を大きくして、初めの方や終りの方などを、二三度繰り返して見たが、不知苦笑を洩らして、

「芝居を驕らう！」

と言つた。そして件の手紙を袂のうちにしまひ込んだ。

「それ御覽なさいな。人を散々ばら疑つてさ。ひどいわ。ひどいわ。恁うして……。」

姫松の綺麗な猿臂は、恐しい勢で葉山の膝頭に吶喊した。

「あゝ好い氣味だ。何とも言はれない。もつと強く捻つてお呉れ。そこ

は丁度南京豆に食はれた痕で、先から不斷にコリ〳〵やらかして居た所なんだ。」

葉山は平氣で捻らして置き乍ら、

「處で確に降參はしたが、一體如何云ふ譯なんだ。詳しく聞かして呉れないか。」

と眞面目になつてお若に訊いた。

「實は恁うですよ。」

とお若は勿體ぶつた口調になつて、十時頃桃澤と柳之助とが、微醉機嫌で玄關に現はれた初まりから、姫松が來たところまで、詳しく眼に見える樣に物語つたが、

「さあ、今度はお次ぎの番だよ、出したり出したり……。」

と妙に惡身をしながら、さつさと座敷を出て行つた。

姫松は莞爾したが、落ち附いた調子で次ぎの樣なことを語つた。

姫松の「しき島」へ來たのは、恰も十一時々分で、二人とも可也醉ばらつて居たのであつた。姫松は柳之助の顏を一眼見た瞬間に、直ぐ昨年の春の夜のことを思ひ出した。そして驚いた口調で、お久振りだわねえと言つたが、柳之助の方でも亦驚いて、嘸ぞびつくりしたらう。僕が此んな場所へ來て居るのでと言つた。それから葉山が近頃來るかとか、お前達のやうな苦勞のない、浮き〳〵した體になつて見たいとか、此の前とはすつかり違つた調子で、大に饒舌つたのであつた。其の末に桃澤と二人で、人生は如何だとか、煩悶はどうだとか、戀愛はどうだとか、姫松などには、まるで珍紛漢紛で解釋のされない事を話し合つたりして、お肴も食べずに酒許りがぶ〳〵呑んだ。

恁うして十二時近くになつて、二人は歸らうと云つて起ち上つた。桃澤は何ともなかつたけれど、柳之助はヨロ〳〵とそこへ倒れた。そして正體もなく醉ひ潰れて了つた。仕方がないから、別座敷に蒲團を敷いて、桃

澤やお若が手傳つて、柳之助の體をその上へ持ち運んで寢かした。桃澤は宜しくたのむと言つて歸つて行つた。姫松は手拭に水を浸して、枕元に坐つて何遍も〳〵柳之助の額を冷した。すると一時に間もない頃、柳之助は俶爾り起き上つて、キト〳〵した眼で姫松の顏を見た。姫松は先程のことを語つて聞かせて、どうせ遲くなつたから、お宿なすつたらどうですと、お若と二人ですゝめてみたが、彼は飽くまでも歸ると言つた。酒も大分醒めた樣子であつたので、それではと帳場の車夫に好く言ひ含めて、根岸の下宿へ送り屆けたのであつた。

柳之助が車に乘つたとき、大變厄介になつた。其のうちに來て禮をすると姫松やお若に言つた。

姫松は恁う語つて、猪口を飲み干し、葉山に差して酌をしながら、

「するとねえ。あとで敷團を片付けた時分に、落つて居たのが此の手紙なのよ。でもねえ。驚見さんが心配なさるといけないと思つたから、お落しなすつた手紙は、葉山さんの方へお屆けしたから、安心して下さいつて、昨夕のうちに葉書を出しておいたの、だから驚見さんの方は、心配なさらなくつても好いわ。」

先程から、眼を睜つたり、首を傾げたり、頷で頷いたりして、熱心になつて聞いて居た葉山は、漸く口を開いて、

「やあ、御苦勞〳〵。手紙の一幕はそれですつかり釋つた。すると何だな、驚見は此の手紙を出さうと思つて外へ出た時に、その桃澤と云ふ人と行逢つて、きつと引つ張られて來たのに違ひない。そして醉拂つて落したのだらう。」

恁うすこし沈んだ調子で言つたが、間もなく元の快活な葉山に復つて、

「まあ、それで鳧が附いた。今度はひとつ陽氣に飲み直さうぢやないか。」

「えゝ。ひとつ彈きませう。久し振に鎗錆でも聞かして頂戴……。」

姫松は嬉しさうに葉山の顏を見て莞爾した。

中庭の向ふ座敷からも、奥の座敷からも、三味線の粋ふ音〳〵が響いて來て、「しき島」は陽氣に浮き出された。

（十八）

葉山に宛てた柳之助の手紙と云ふのは、全文悉く悲哀、絶望、煩悶、恐怖などの刺戟の強い文字許り羅列してあつた。それを具體的に言へば、獨身主義や死者に誓つた言葉は、自分の性格として、如何しても抂げ難い苦痛を舒べ、それからお種と道子を比較して、道子はお種よりも人格に於いて數等下だ、自分はさう云ふ女を假に貰はうとしても、必ず今よりは猶以上の苦痛を見なければならぬと云ふ、甚く女を恐れた自家の臆測を諄々しく書いて、今度は葉山に絶交だと言はれた言葉に對して、力を極めて其の無情を責め、終りには字を大きくして、二重圏點まで附して、一生の願だから、僕の心中を察して、何卒道子を妻に貰はうことは許して呉れ、その上君と絶交することも亦許して呉れ、若しそれを君は飽く迄で斷行すると云ふなら、僕は自殺して了ふかも知れない――恁んな激烈な穏でない文字迄書いてあつた。そして葉山の名前を認めたあとに、小さく思ひ附いたと云ふ風に、而し其うち道子を貰はう氣にならぬとも限らぬ、と頗る撞着した文字さへ書いてあつた。

葉山は此の手紙を讀んで、魚籃に入れた魚に逃げられた樣な氣がした。そしてがつかりして了つた。最後の虎の巻として放つた絶交と云ふ言葉も、豈夫これ程壓迫力の貧弱なものであらうとは、葉山は今の今まで考へて居らなかつた。何でも別るゝ時分にも、彼は身に浸みて、涙まで滚ぼして自分の忠告を聞いた程でもあつたし、きつと色好い返事を越して呉れるに相違ない――葉山は恁う信じて居たのであつたが、今此の手紙に依つて、夫は徹頭徹尾空想に終らせられて了つた。啻に空想に終らせられた許でなく、其の餘に悲哀的な、絶望的な、そして嘆願的な彼の手

紙に對して、葉山は飽くまでも自分の意見を通すに忍びない樣な、其樣氣もさせられたのであつた。

けれども葉山は考へた。是で終りを告げて了つては、自分の今迄した努力は、何の意味もない、權威の稀薄な、茶飲話同樣なものになつて了ふ。そして其の極は驚見は依然として煩悶を續け、お種も自分も仍且絶えず心配しなくてはならぬ。本來、然ふ云ふ彼我の心の惱みを排ひ退けて、其所に一道の光明あらしめたいとの目的でした自分の努力である以上、什うして夫なりに萎縮して了ふとが出來やうぞ。尙更に進んで此の權威の稀薄な茶飲話しに、生々した清新の芽を吹出させなければならぬ

葉山は種々に心を勞した末、今度は恁う云ことを案出した。柳之助のやうな人間は、或る程度迄は墮落させて、そして女其物の眞の味を知らしめなければ嘘である。それも結婚など云ふ迂遠なことでなく、手取り早く自由のきくものでなければならぬ。自由のきくものとは何だ。曰く藝妓買である。彼の今度待合入をした其の機會を利用して、以來すこし女に接近させやう――葉山は恁う思つて、知つた藝妓を彼か是かと數へ初めたが、松葉家の榮子と云ふのに白羽の矢を立てた。此の藝妓は餘程の變人で、人が頭を下げて賴めば、大抵の無理でも嫌を言つたことのない、俠客氣質が賣物の女である。其の上容色も美で、鼻附は全然違ふが、顏の輪廓や、口元の優しいのや、眼附の涼しい具合などは、何處か恁うお種に似た面影があつた。葉山は此の女に因果を含めて、どんな手段を用ひても柳之助に引導を渡して貰はうと考へた。而して又恁う思つた。すると柳之助は、彼云ふ性格だから、何時か知らず佶度女を愛することになる。屢々通つて行く。夫が或る程度に達したとき、女から難題を持ちかけさせる。妾は貴郎の奥樣になりたい。下宿屋へ押しかけて行きますから、好う御座んすか――恁う言はせる。柳之助は自分の處へ飛んで

相談に來る。自分は、それは大變である。君は無妻だから其樣難題を言はれるのだ。一體彼云ふ社會の女は、一旦恁うと思ひ込んだら、飽くまで夫れを通さねば舍まぬ氣質を有つて居るから、必度推しかけて來るに違ひないと嚇すのだ。彼はいくら何でも藝妓を落籍せると云ふ、そんな自信は有ち得ない人間であるから、勢ひ順序として女を恐れる。その虛に附け込んで、結婚問題を再提するも妙である。若し此の計畫が不幸にして成功しなかつたならば、最う自分は施すべき策を知らぬ。自然の運命に任しておくより仕方はない――

葉山は以上の樣に考へて、何と云ふ惡劣な困窮した策略だらうと、自分の智慧の足りないのを耻しく思つた。しかし柳之助に妻を有たせたいと云ふ、熱烈な自分の意志さへ貫徹すれば、手段の如きは決して問ふ所ではないとも考へ直した。

彼は或る一夜、「しき島」へ遊びに行つて、姫松と榮子を聘けた。彼は

榮子に對つて云々の事情を舒べて切に賴んだ。榮子は苦もなく――寧ろ喜んで承諾した。而して御都合の好い時分に連れて入らつしやい。私は是非共思ふ壺に嵌めてお眼にかけませうと言つた。

其れから五日目の、日曜の夕方であつた。葉山は連れ出す心算で、根岸の下宿へ柳之助を訪れたのであつた。

柳之助は相變らず暗い顏をして、欄干に靠れながら、薄りと暮の色に彩られて行く、白い隣の土藏の壁を見詰めて居たが、葉山の姿を見るなり、直ぐに座に就いて、

「君は手紙を見て吳れたんだらう……。」

と然も面目なさゝうに訊いた。

「見たよ。何しろ餘り哀ぽい手紙で、君の意中を察しると、此の上勸めて見る氣にはなれなくなつた。自殺でもされた日にや騷動だからね……。……兎に角彼の語は永久の宿題として置かう、君の氣が變る迄で……。」

葉山は例の暖い顔色で柳之助を見た。

「有難い。有難い！」

柳之助は早口に言つたが、

「實は君の口から、然う云ふ言葉を聞かうと思つて、僕は彼の手紙を、恰も戰爭でもしとる樣な氣で書いたのだから……。」

「ぢや、大方君の射つた彈丸が、僕の胸を貫通したのだらう。結句僕が君に負けた譯になつたのさ。」

葉山は下腹のあたりで笑つた。

「さうだ。君は負けたのだ。」

柳之助は顏の表に嬉しさを輝かしたが、癪て沈痛な口調になつて、

「しかし、君の忠告を容れない僕も、君から見たら或は無理かも知らんが、君も亦甚だ無理だつたよ。平素僕の氣質を了解しとる君にも似合はぬ、厭制極る忠告だつたもの。實際僕は心の中で、恨みもしたし慨きもしたのさ。何故つて然うだらう。道子を貰はないと絶交だとは酷いぢやないか。君に絶交されて、僕の身が一日でも安全だと思つとるのか、實に無情の言だ……僕は彼の晩、宿へ歸つてからも、どれ程それを心配したか解らんのだ……。」

「だから降參したと言つてるぢやないか。勝つたからつて、然う向面になつて弱者に威張るもんぢやないよ。」

柳之助は苦笑を漏らして、

「威張る譯ぢやないが、唯だ君に、君自身の負けたと云ふ理由を說明してやつたのだ。」

「おや〳〵御叮嚀樣なこつた。夫れで愚昧の某、ちやんと某の負けたと云ふ理由を了解しました……。」

「ね。解つたらう。」

「はい、解りました……夫は解つたが、別に解らぬことが一つあるよ。」

「何だい？」

「何だいもないもんだ。君は五六日前の晩に待合へ行つたらう。それが僕にや解らないのさ。」

「でも君は、その通り明瞭に知つてるぢやないか。女から僕の手紙が送つて行つた筈だし、それにもう詳いことは女から聞いたんだらう。」

柳之助は不思議さうに眼を睜つた。

「是は〳〵穿き違ひと來たね。待合へ行く樣な人間にも似合ない、什うして然う解りが疎いだらう。一生の大切を身に控へて居ながら、待合なんかへ揚ると云ふ、君の心理狀態が解せないと云ふことさ。」

「何だ。さう云ふ意味なのか。道理で變だと思つた。」

柳之助は間の惡るさうな顏をしたが、それから當夜の煩悶の狀態から、手紙を懷中に入れて外へ出で、覺はず待合のある町へ足を入れたことや、其所で偶然、學校の同僚の桃澤と、行逢つて無理に誘はれて揚つたことなどを、諄々しく葉山に物語るのであつた。

葉山は欠伸を二三度、鼻から拔かしながら聞き終つたが、

「然うかい。夫で待合行の所由が解つた……。」

と伸びと欠伸を一所にして、

「何うだつた。彼云ふ場所で、藝妓を揚げて酒を飲むと云ふことは、君の平素侮蔑した樣に、そんなに不愉快なものでもなからう。」

「無論愉快ぢやなかつたが、何だか攪亂した頭がすこし輕くなつた樣な氣がしたよ。」

「そりや結構だ。段々遊び附けると、一日增しに愉快になつて來るのさ。心に愉快を感じる樣になりさへすれば、もう占めたもんで、君の苦悶病は忽ちケロリとして了ふのだ。丁度鼻風を感いた人間が、扁鵲の藥を飲んだと同樣にね……。」

「僕は彼の夜つく〴〵考へたね。たとひ一時的でも關はんから、恁んな

ことで苦悶が忘られるなら結構だと……そして心に何の苦勞もなく、謠を唄つたり、三味線を彈いたりして、自由な月日を送つて居る藝妓と云ふものを大に羨んだね。」

柳之助は身に浸みた樣に言つた。

葉山は、柳之助がそろ〳〵自己の藥籠の口元に迫つて來た樣な氣がした。

「處が、藝妓達は彼れで却々苦勞があるのだよ。仲には君以上に苦悶してるのも有るかも知れない。しかし彼等は中の苦悶を、外の陽氣で逸散させて了ふ術を知つてるのさ。此の點から行くと、君はたしかに藝妓以下だよ。苦悶を逸散させる方法はあつても、それを敢えてしない人だもの……次來すこし遊ぶと好い。」

「さうかね。藝妓にも然うした苦悶があるのかね……。」

「嫌やに感心して了つたね。いや感心と云ふと、「しき島」の女や藝妓が、非常に君に感心して居つたよ。」

「どんな風にか？」

「昨年見た鷲見さんと違つて、却々捌けて入らしつたつてさ。」

「僕は格別さばけても居らんぢやないか。それに女が然う云ふとは、實に不思議だね。」

「でも、君は西洋料理を主張しないで、上るが早いか、突如酒を主張したさうぢやないか。」

葉山は恁う言つて笑つた。

「そんなことが、捌けたと云ふのかね。」

柳之助は腑に落ちない調子で言つて、

「たゞそれだけか？」

「まだ却々あるさ。お肴も食べずに酒許りがぶ〳〵呑んで、終ひにや醉倒れて、蒲團の上に寢かされて、額を水で冷されても、一向御存じなし

にぐう〳〵鮮をかいて入らしつた、彼の御樣子の好かつたと、眞度に惚〳〵して了つた。神樣佛樣に願がけしてかなふものなら、今一度驚見さんのお顏が拜みたいつて……。」

「莫迦な……。」

柳之助は苦が笑ひしたが、極く眞面目になつて、

「何しろ、彼の夜は、氣が非常に亂れて、神經が大變に昂奮しとつたもんだから、夫れを忘れやうと思つて、前後を顧みず、唯だ無茶苦茶に飲んだのさ。平素なら二合足らずの酒で可也醉ふのが、彼の晩は彼是四五本も飲んだらう。いや全く酩酊したのだ。眼を醒まして視ると、そら君の藝妓が、僕の枕元で介抱しとるだらう。僕は非常に氣の毒に思つてね、近いうちに禮に來るつて約束をしたんだが、未だ行かずに居るのだ……。」

「そりやいかんよ。彼云ふ社會の女には、決して義理を缺くもんぢやない。一日も早く行つてやらなくつちや嘘さ。」

「行くのも好いが獨りぢや……。」

「某がお伴をするよ。」

「ぢや何時でも行かう。君が一所なら……。」

柳之助は元氣好く言つて、何か考へて居たが、

「如何な物を禮に持つて行つたら好いのか？」

「佐渡の土さ。」

「えつ？佐渡の土？お呪禁にでもするのだね。藝妓がそれを貰はうと歡ぶのか。」

葉山は噴出したいのを。一生懸命に堪へて、

「歡ぶの歡ばないのの話しぢやないさ。藝妓等には夫が一番有難いのだ。」

「さうか。實に妙だな。彼所の土地は、元來黃金を以て有名だが、それぢや佶度なんだな、其の土を、身に附けて居ると、金錢が貯ると云ふ迷信だらう。」

柳之助は獨で感服して居る。

「當らずと雖も遠からずだらう。僕は詳しいことは知らんが……。」

「しかし、其の土を求めるにしても、ちよつと日數がかゝるから、今の用には足りないね。困つたな……。」

「好いよ。心配しなくとも……僕がちやんと用意して置いたから……。」

柳之助は眼を大くして、葉山の顏を眤ッと見たが、

「感服だね。君は矢張り彼云ふ場所へ行きつけとるもんだから、始終さう云ふ物は用意しとるんだね。」

葉山は此の上柳之助を調戯ふのも罪だと思つた。で、それつきり佐渡の土の話しは舍めにして了つて、

「何うだい。今から出懸け樣ぢやないか。」

と、連出の方へ話を持つて行つた。

「行かう！」

柳之助は、何の躊躇するところもなく、恁う威勢のある聲で言つた。

（十九）

葉山は其の夜も「しき島」へ行つた。而して豫ねての計略通り、榮子と姫松を聘けて、殆ど馬鹿騒に近い程喧かして遊んだ。柳之助は折々浮かぬ顏をしたが、それでも心中愉快らしく遊んだ。そして料理も相當に食べたし、酒も可也飲んだ。角のとれないぎく〳〵した、變挺古な串談も一つ二つは言つた。

柳之助が串談を言つた度毎、葉山は是りや面白い、實に妙言だと、囃し立てる樣に大に笑つた。すると榮子も姫松もお若も、みんな笑つた。そして言葉を連ねて、眞度に驚見さんは隅におけないわねえ——恁う言つてやんやと賞めたてるのであつた。

それでも、柳之助の顏には、餘り得意の色も動かなかつた。

柳之助は、どうしたのか絶えず榮子の顏に眼を注いで居つた。而して姫松よりも葉山よりも、比較的多く榮子に口をきいた。榮子も亦始終柳之助の傍を離れずに、妙く調子をとりながら、葉山以上に彼を待遇するのであつた。

柳之助が榮子と言葉を交はす時、特別につやを有つた調子で言つた。

耳の聰い葉山は今度こそ占めたと、心のうちに喜んで居た。

葉山は燒苔をちよつと手で摘んで、それを口に入れたが、柳之助に猪口を差して、

「昨年の春だつたね。玆へ初めて君を連れて來た時、此の姉さんを捕へて、肖てるとか肖てないとか言つて、大に君と議論をしたことがあつたね。まだ記憶に殘つてるだらう……。」

と、默つて笑つて居る姫松を指した。

「そりや殘つとるさ。」

と柳之助は酒息を咈と吐いて、姫松を眤ッと見たが、

「しかし彼の夜は、君の方が敗北だつたよ。」

「さうだ。彼の夜は確かに敗北したが、今夜は必ず勝利だ！好く見給へ。誰かに似てるだらう……。」

葉山は、今度は、褄だけにちらりと竹の模樣を見せた、地味な細かい格子縞のお召に、澁い光澤消しの絲錦の丸帶を締めた榮子を更に指して言つた。

「あら、今度は姉さんの方へお鉢が廻つて行つたわねえ。」

姫松は前にあつた猪口を飲み呷して、それを榮子に献して酌をした。

榮子は何が何だか、颯張り意味が解らなかつたが、夫れでもパッを合はして、

「好つく御覽なさいましな。誰かに似て居ますから……だけど、累の孫が宜しく言つたよなんか有仰つちや、眞平御免ですよ。」

と笑ひながら、柳之助の方へ顔を持つて行つた。

柳之助は苦笑して、そつと瞬しさうに其の顔を見たが、直ぐに葉山の方へ眼を轉じて、

「今夜はたしかに僕が敗北したよ。實は先きから非常に好く似とると思つて大に感服しとつたのさ。僕は如何して此の頃、恁う頻繁に君の妻君に似とる婦人と會合するのか、實に不思議でならんのだ……。」

と、其の眼をパチ〳〵させた。

「其の癖いつも惚されるから妙さ。今夜だつて何だか莫迦に雲行が好いやうだぜ。色男奴！」

葉山は榮子の顔を見て、につと笑つた。

榮子は莞爾笑つたが、

「眞度に此の方は、實が有りさうで頼母しいわ。……はい、思ひ献しですよ。」

と、呷いと飲んだ猪口を直ぐに柳之助に献した。

柳之助は胸の踊る樣な氣持で、其の猪口を受けて一口に飲んだが、直ぐに又榮子にさして、

「返杯だ！」

「まあお早いこと、でも何とか有仰つて下さいましな、此の猪口に附いて……。」

榮子は受取らうとした手を、ちよつと引つ込ましながら柳之助を視た。

柳之助はぐつと行き詰つたが、軈て非常な決心でもした樣な態度で、

「ぢや、思ひ獻しだ！」

「あら、御挨拶！思ひ獻しは嬉しいけど、何だか「ぢや」が氣になるわねえ。」

榮子は笑つた。

葉山も姫松も堪へかねて噴き出した。

柳之助は獨り苦笑した。

小間くすると、柳之助は袂から手帳を出した。そして其のうちの紙一枚を拷つて、鉛筆でさら〳〵と字を書いた。彼はその紙片を捻つたまゝ葉山の膝に投げた。

葉山は變なことをする男だと思ひながら、其の紙片を開いて讀むと、

「佐渡の土を早くやつて呉れ。何だか姫松が氣にかゝつて仕方がない。序に餘分があるなら、此の榮子と云ふ藝妓へもすこし分けてやつて呉れ。」

恁う書いてあつた。

葉山はまた噴出したが、直ぐに紙片を火鉢にくべた。そして紫色の煙を騰げながら、その紙片の燒けて行く有樣を眤ッと見詰めたが、

「そんなことは心配しなくとも好いよ。あとで僕が妙く取計つて置くから……まあそれよりか、大に飲むが好い。」

柳之助は面白くない顔をしたが、何も言はずに唯だ頷いた。

恁うして何時か知らず、しき島の夜が深けて行つた。

葉山も可也酩酊の氣味であつたが、柳之助も先の晩に劣らぬ程大醉した。葉山の注意で剃つて來たのか、蒼々した髯の痕の見える顎の邊を除いては、彼の顏の何處もみんな猩々の樣に紅かつた。そして恍けさうな細い眼を膝の上に落しては、時々充血した唇を舌でペロリ〳〵舐めた。

此の有樣を見て居た葉山は、すぐに榮子に眴して中座した。榮子は其の後に尾いて是も中座した。二人は餘り電氣の光の通はぬ、階子段の横の薄暗い小座敷にずつと身を入れたが、

「もうそろ〳〵引き上げやうと思つて居るが、後はすつかり賴んだぜ。何しろ彼の通りの難物だから、ひよつとするとズトンと來るかも知れないが、そこを怒乎としないで、巧妙くやらかすのが粹者の手柄さ。」

葉山は聲を潜めて榮子に言つた。

「承知の助！此方の胸にもちやんと應へが有馬の水天宮でさ。御心配に

や及びません！」

榮子は忍び笑をしながら、トンと拳で胸を打つて見せた。

「しつかり受合つたか……。」

「はあ、しつかり受合ひました。首尾よくお眼に止まりましたらば、御喝采の程を願ひます……。」

「太夫さん車輪の働きと云ふ所だね。しかし萬に一つ乘り損つたら、大向からどつと惡落が來るよ。」

「大丈夫ですつてば……でも貴郎の仰有つた程、木訥漢さんでもないちやありませんか。私彼んな方大好きさ。正直で、實があつて……。」

「其樣ことを言つて、秘密で惚れてちや打ち破しだよ。」

「それは什うだか、保證の限りにあらず……。」

榮子は恁う言ひ捨て座敷へ戻つて來た。

今度は姫松が中座した。

榮子は柳之助の體に、ひつたり接近く樣に坐つて、

「さあ、今度は此方が眞猫よ。二人で仲好くして飲みませうねえ。」

と、柳之助の見て居た鏡を呼つと飲んで、それを新に獻した。

柳之助は默つて受けて一口飲んだが、

「葉山君は如何した？」

と、何だか非常に氣になる樣子であつた。

「今姫ちやんと內證話ですとさ。好いぢやありませんか、そんなに氣になさらなくつても……彼方は彼方、此方は此方でさ……。」

榮子は恁う言つたが、浸りした調子で、

「貴郎！後生だから、是を御緣に折り〳〵入らしつて下さいな。ねえ。こんな活業はして居るんだけど、根からの浮氣者でもありませんよ……。」

「來るよ！佶度來るよ！」

柳之助は榮子に酌をしてやつた。而して暫く考へたが、

「お前にも苦勞があるのか……。」

と藪から棒に訊いた。

榮子は突如な柳之助の問ひに、一寸面食らつたが、軈て哀れつぽい聲になつて、

「ありますともさ。私達の樣な活業の者は、誰一人だつて苦勞のないのはありやしませんわ。成程好い衣服を着て、お化粧をして、唄つて、彈いて、どんなお客の前をも憚らずに、勝手な熱を吹いて騷いで居るんだから、そりや外は面白くも陽氣にも見えませうさ。だけど、內幕へ這入ると、みんな家が貧乏で、其日の口糊も過ごされないのを救ふ爲とか、長々の病氣で床就いて、足腰もたゝぬ親への仕送の爲めだとか、不幸な兄妹を人にしたい一念の爲めだとか、そんな慘目なこと許り潛んで居ますさ。ちつとは外を陽氣にでもしないと、唯の一日だつて生きちや居られまん……。」

榮子は、恁んな平凡な、子供欺しの樣な述懷をして聞かせたが、柳之助は夫れでも甚く身に浸んだ樣子で、ほろりとして耳を傾けて居たが、軈て酒息を吩つと吐いて、

「何でも、葉山君もそんなことを言つとつたが、聞いてみると隨分怨襟い活業だな……お前の身の上は……。」

如何にも熱心に眞面目に訊かれるので、平素恁んな話には嘘で堅めて居る流石の榮子も、何だか勤め氣を離れて打ち開けたい樣な心持もするのであつた。何年となく多くの客に接しては居るが、今夜の客程眞實になつて訊かれたことはなかつたので――

榮子は遂ひに身の上話を柳之助にしたのである。自分は名古屋で產れたが、家が貧乏な爲に五歲の時此の松葉家の養女に貰はれて、十七の春から一本の披露目をした。そして今年で五年目になると云ふことから、

毎月稼高の幾分を割いて、國元の親人へ仕送りして居る經濟の苦しいことや、恁んな風で知らずに居る間に日月が經つて、何時元の素地に還へられることやら、將來を思ふと、心細くなつて泣きたくなつて了ふなどと、すこしはお加けも附けて物語つたのである。

柳之助は遂ひに涙を落した。彼はあはてた樣に半巾で二三度眼を拭つたが、濕つた調子で、

「お前も實に薄命な女だな……。」

其の有樣を眤つと見詰めて居た榮子は、然も氣の毒さうな顏附をして、

「そんなことを、眞味になつて言つて下さる方は、全く貴郎許りよ。私眞實に嬉しいわ。」

と、是もほろりとした調子で言つた。

「僕にも苦悶があるよ……。」

柳之助は突然恁う言つて、がぶりと酒を呑んだ。

「おや、貴郎にも……何卒聞かして下さいな。」

「いや、今はちよつと言はれんのだか、追つ附け聞かして遣らう……。」

榮子は葉山からも打ち明話があつたので、大概は柳之助の身の上を知つて居たから、それを追求して聞かうとも思はなかつた。

「では、何時かねえ……あら、なんだかお話が濕めつぽくなつて來たわねえ。ちつと陽氣にしませうよ。」

榮子はそれから一つ二つ、自慢の二上新内を、誘る樣な美しい聲で唄つたが、急に思ひ附いた樣な調子で、

「貴郎、ちよいとお耳を拜借……。」

恁う言つて、ずつと柳之助の體を抱き締める樣に靠れかゝつて、何やら小聞囁くのであつた。

石の樣に堅くなつた柳之助の體には、細い幽かな戰慄が見えて居た。

そして息を喘ませたり、醉眼を瞋いたりして聞いて居たが、

「そりやいかん！そりやいかん！」

と、驚いた樣な聲で言つた。

（二〇）

其の翌くる日のお晝過ぎであつた。

風は寒いけれど好い天氣で、暖いポカポカする日光が、茶の間の前の緣側一ぱいに辷つて居た。緣側の一部には綺麗な花莚が敷かれて、其の上には頭のもげたブロドッグや、胡粉の剝げたひよつとこの面や、獨樂鐵砲、サーベル――種々な玩弄が散らばつて、外へでも遊びに行つたのか、小い主人公の影が見えなかつた。其の代りに赤い絹片の首輪を附けた、產れて一と月程しか經たぬ樣な三毛の小猫が戲けて居た。

小猫の對手は道子であつた。

道子は背のあたりを日光に浴せながら、何思ふともなく、恍惚とした眼附で小猫と戲けて居たが、突然、

「姉さん、私今日歸るわ……。」

と、茶の間で縫物をして居たお種に言つた。

「おや、何故……。」

とお種は針の手を止めて、眼を道子の方に注いだが、

「何故さう急に歸ると言ひ出したの……。」

「餘り急でもないでせう。もう彼是十日も御厄介になつたんだもの……。」

「十日だつて、二十日だつて好いぢやありませんかねえ。家に居たつて、どうせ遊んで居るんでせう……。」

とお種は笑つた。

「それは左樣だけれど……。」

道子も莞爾したが、

「でも、矢張り歸るわ。」

「什うしても歸るの……尤も待遇が惡いから仕方はないけれど……。」

お種は輕い皮肉を言つて笑ふと、

「あら　姉さん、ひどいわ。私そんな心算で言つたんぢやないのよ。」

と道子は甘へた樣な聲で言つて、一寸お種を優しい眼で睨めたが、

「此の上お待遇されたら、宿賃を置かなくつちやいけないわ。」

と、今度ははしやいだ樣に言つて笑つた。

「では佶度、宿賃をとられるのが怖くなつて、それで歸ると言ひ出したのねえ。私の方では、今日あたりからそろ〳〵お待遇を上等にしやうかと思つて居たところなの、だけれど、決して宿賃は頂きませんから、悠然遊んで入らつしやい……。」

お種は笑ひながら起ち上つて、茶簞笥から菓子器を取り出したり、埋木の茶盆を梅の花の刺繍のある布巾で拭いたりした。そして間もなく茶は初つたが、其の茶話のうちにも、お種は淋びしいからを諄〳〵言つて、道子を引き止めてはみたけれど、道子はどうしても歸ると言つて承かなかつた。

そしてお花の咲いた時分に、又悠然宿りがけで遊びに來るからと云つて、其の日の三時頃、富士見町の葉山の家を歸つて行つた。

お種はそれから、保の破つた障子の切張をしたり、女中を指示して夕飯の仕度をさせたり、電氣の來る迄は忙はしく過したが、それも終つて一と息吐いた處へ、葉山が例ものの元氣で歸つて來た。

葉山は何時も出迎へる筈の、道子の姿が見えないので、

「道子は什うした？」

とお種に訊いた。

「今日三時頃歸つて了ひました。貴郎に宜しくと申して……。」

お種は葉山に衣服を着換へさせながら言つた。

「さうか、もう歸つたのか。格別面白いこともないから、飽き〳〵したんだらう。しかし道子も好い面の皮さ。散々手品の種に使はれて……。」

葉山は笑つたが、

「時に手品と云へば、俺に手紙が來てる筈だが……。」

と、火鉢の前に坐るなり恁う訊いた。

「はい。參つて居りますよ。松野榮太郎さんから……それも大方保險金の一件で御座いませう……。」

お種は苦笑しながら、書簡刺から手紙を拔き收つて葉山に渡した。

葉山も苦笑しながら夫れを受取つたが、此の前の樣に躊躇もしないで、急いで封を押し切つて讀み初めた。

お種は七輪の上にかけてあつた、鍋の蓋をとつて、沸々煮え立つて居る鷄のお汁の味を試きながら、

「矢張り御足勞を願ふので御座いませう。」

「嫌やに皮肉を仰有るな。此の手紙は……實はお前にも……う丶好かつた〳〵。萬歳〳〵。我が目的半ば達せりだ……實はお前にも見て貰はなくつちやいけない手紙なのさ。」

葉山はお種に返言するのと、獨言を言ふのと一所くたにしながら、手紙を讀み進んだが、軈て終ると、然も滿足らしい微笑を口元に浮べるのであつた。

手紙は言ふ迄もなく榮子から來たのであつた。初めには昨夜の挨拶を一通り舒べ、次ぎには葉山が居なくなつてからの、柳之助と自分との對話の模樣を詳しく書き、いよ〳〵本題に入ると、初めは美事にズドンと食つたが、夫れでも萎まず腕に涙をかけ、一生一代の六韜三略を搾り出して、什うか恁うか思ふ通りに納めたから、安心して下さいと書いてあつた。

葉山は件の手紙をお種の方へ推しやつて、

「さあ、奥さん、何卒御覽あそばせ……。」

と、道化た樣な口調で言つた。

お種は見向きもせずに、

「私は拜見しなくつても宜う御座います。」

ときつぱり言つた。

「おや〳〵。御挨拶だね。平素の口と違ふよ。」

「はい。それでも……。」

「平素の口と違ふと云ふのに……。」

「でもさう云ふものを拜見しますと、私のやうな臆病なものは、氣が違つて了ひますから……。」

「是りや可笑しい。惡く履き違へて御座るよ。拜見されて實は此方が迷惑なときには、强つて拜見と來るし、今日の樣に此方から拜見を願ふ時には、臆病だから見れば氣が違ふとお出なさる。世の中は什うして恁う意地の惡いもんだらう……宜しい、それ程お嫌やなら見て貰はうまい。」

葉山はブツ〳〵言ひながら手紙を卷き初めた。

お種は其の良人の顏附を偷み視て、何だか平素とは調子が違つて居る樣にも思つた。而して非常く氣色を損じた樣にも見えるのであつた。で、是が若し眞實用のある手紙であつたら、良人にも氣の毒である、欺さるのを覺悟の上で見る分には、何も然う無情斷るにも當らぬことだ――お種は恁う氣持を直して、

「それ程なら、何卒拜見さして頂きませう。」

と、葉山の顏を見た。

葉山も氣色を直して、半分以上卷きかけた手紙をお種に渡しながら、

「人を散々じらした癖に、見たいものは矢張り見たいんだね。」

と笑ひながら言つた。

お種は默つて手紙を讀み初めた。而して嫌な顏をしたり、ぽつと顏を

紅くしたり、眼を睜つたりして、到頭終ひまで讀んだが、夫を葉山へ返しながら、

「まあ、貴郎も隨分で御座いますねえ。」

と呆れた樣な調子で言つた。

「何うだい。一寸驚いたらう。實は此の事はお前にも相談しやうと思つたが、根が賞めたことでもないしするから、屹度お前は反對するだらうと――然う考へたので、俺が獨で斷行して了つたが……。」

「若し此んな事が根になつて、鷲見さんが放蕩でもされる樣なことになつたら、それこそ大變ぢや御座いませんか。貴郎は眞度に……。」

「だから手品の種は其所にあるのさ。」

「どんな種で御座います？」

葉山は豫ねての計畫のことを、詳しくお種に語つて、

「ね。然んな譯さ。隨分念入の細工だらう。自分でも實は莫迦〳〵しくつて堪らないのだが、お前も知つてる通り　虎の卷の絶交を露呈してさへ、彼んな失敗を食つた程だから、迚も普通大抵の計略ぢや覺束ないのだ。そこでとつぱなれの荒療治と出懸けたのさ。若し是でも成功しなかつたら、俺はもう蒲團を被つて寢る許りだ。外に仕方が御座なく候だもの……。」

お種は什う應へて好いのか、殆んど返言に窮したのであつた。お種は元來嘘を吐いたり、他を計略にかける抔と云ふことは大嫌ひであつた。寧ろ容易ならぬ罪惡の樣に思ふのであつた。で、最初道子を貰はせやうとして、柳之助を彼んな風に繰つたのさへ、内心では非常に惡行爲だと恐れて居たのであつたが、夫は直接自分の身の安心になる事ではあり、又柳之助自身にとつても爲になることではあるし、妙く纏るものなら其れでも好い――恁う諦めを附けて居た位であつた。それが今設ひ外れたにもせよ、他に幾何も方法があらうと云ふのに、彼の佛の樣な柳之助に

藝妓買ひまでさせて、後に計略を用ひやうなどと云ふ良人の心が、お種には甚く恨めしかつた。淺間しく思へた。そして更に、何も知らずに其の計略の手に繰られて行く柳之助をば、堪へ難い程氣の毒にも哀れにも感じるのであつた。

お種は恁う考へて、何時薄らぐともなく薄らいで居た、柳之助に對する愁情を新に胸に喚び起すのであつた。

何時まで經つても、お種は屈托さうな顔をして考へて居る許で、何とも返言をして呉れないのを、葉山はもどかしく思ひ、

「おい、何うしたんだい。人が折角苦心して案出した計畫だのに、一言の挨拶もないとは……それとも不贊成だと云ふのかい。」

と、煙草の烟を輪に吹いて、お種の顔を恐る〳〵視詰めた。

「はい。大不贊成で御座います。然う云ふ惡計略までなさる樣でしたら、私は寧そ現在の儘で過して行つても宜いと思ひます……貴郎さへ何ともお思ひなさらなければ……私さへ辛棒する氣になれば……。」

お種は聲を濕まして言つた。

「如何にも……。」

葉山は空嘯いたが、

「一と月や二た月なら知らぬこと、十年も二十年も、什うして其樣不安な氣持で生活が出來ると思ふかい。莫迦奴！又驚見にしても然うだ。何時まで待つても自分の所有にならぬ人を思ひ詰めて、苦しみ悶えて居られるものか、たとひ驚見自身が其を堪へて行つても、傍で見てる友人の俺が、どうして其の狀態を氣の毒と思はずに居られやう。好いかい。元來驚見に妻を有たせると云ふことは、恁う云ふお互ひの不安を洗ひ去る爲めの計畫ぢやないか。處が豈夫と思つた虎の卷さへ見事に外れて了つた、おや〳〵殘念なことをしたで濟まして居られんだらう、そこで再び青息吐息で智慧を搾つてみたが、第二の計略が妙く出て來ない……お

前の所謂高尚な計略さ……仕方がないから、苦しまぎれに恁麼ことをやつたのだ。要り毒草を變じさせて藥となすの理窟さ。まあお前の樣に然う、裾模樣でお豆腐を買ひに行く樣な、惡く立派なことは言はないで、默つて俺の爲る細工を見て居るが好い。何も惡戯半分で此う云ふ計略を用ひたのぢやないから……。」

と、長々しく饒舌つた。

お種は又何とも言はずに、唯だ考へて居た。

此の時玄關のあたりで靴の音がしたと思ふと――女中のお時が取次いだと思ふと、

「彼の鷲見さんが入らしやいまして御座います。」

「さうか、鷲見が來た……噂をすれば影だな。」

葉山が恁う呟いた途端、學校歸らしい洋服姿で、柳之助は茶の間に這入つて來た。

「寒むいね。」

「やあ、今度は影がものを言つた……。」

（三十一）

柳之助は彼の夜、什麼氣持で榮子と關係して了つたのか、彼には恰で夢の樣にしか思へなかつた。其の夢も或部分は朦朧で、或部分は形を書いて、眼の前に示された樣に印象が明瞭であつた。彼は此の印象の明瞭な部分だけを、腦髓の一點に集注させて、而して其れを二度も三度も、四度も五度も繰り返して味はつた。彼はお類と永の別れをしてから、足懸二年の間に於いて、恁う云ふ感情を初めて味はつたのであつた。彼は瞑目して此の感じを嘆美する毎に、渾身の血滴が躍るやうな氣がした。何だか生涯を通じて求め得られない、非常に貴重な、非常に微妙な名玉を偶然に握つた樣な氣もするのであつた

柳之助は恁う云ふ快美な刺戟を與へられて居る傍ら、自制力の薄弱であつた自分を切に嘲笑もした。そして冷汗を流して悔悟もした。死んだお類にも濟まないと思つた。お種にも耻しくつて、顏向が出來ない樣な思ひもした。

更に何の關係もない道子にすら、心のうちを見透さるゝ樣な氣もしたのである。

彼は嘆美しては悔悟し、悔悟しては嘆美した。而して二三日は謎の世界にでも住んで居る樣な氣で暮した。

或夜彼は眠られぬ儘俶爾と床の上に起きた。彼は腕を拱いて咈つと溜息した。そして床の間のお類の油繪に眼を注いだ。其の時、何處からともなく榮子の姿が、影幻の樣に浮顯して來て、お類の顏を被ふた。彼はあの夜榮子から與へられた印象を、其儘朧氣にしか見えないお類の油繪に灑いで、懷しい過去の匂を嗅いだ。そして濟まない〳〵、實に惡いことをした――恁う感じた時、榮子の姿が消えて見えなかつた。彼は更にお種の寫眞に對して眤ッと其の顏を視詰めた。榮子の幻影が浮んで來なかつたが、榮子の顏がお種の顏の何處に似てるだらう――恁う云ふ意識が何よりも先きに働いたのであつた。彼は顏の輪廓と口元とが眞に近い程似て居ると、判斷の結果を得た瞬間に、其の寫眞がお種のだか榮子のだか、明に別目の附かぬ程氣が朦ろになつたが、軈て我に復つた時、若し彼の榮子がお種さんであつたら――恁う思つて悚然と身を戰慄させた。

其から三日目の夜に、又葉山が來て柳之助を誘ひ出した。柳之助は一時は拒んだが矢張り行つた。而して歸つて來ては、以前の樣に嘆美と悔悟をちやんぽんにした。

二月に入つてからも、葉山は柳之助を二三度連れ出した。三月に入ると柳之助は獨りで出懸けて行く樣になつた。彼は此の時代になると、不思議にも暗い世界から光い世界に出た樣な氣がした。鉛の樣に重かつた

頭がはつきりした。怠るい樣な體に元氣が滿ち渡つて、何をしても勢力を一方に注ぐことが出來るやうになつた。そしてお類の油繪には蜘蛛の巣がかゝる樣になつた。幻覺を見る迄に熱愛したお種の寫眞が、二日も三日も机の抽出の中に入れられたまゝ顧みられないこともあつた。けれども、彼は夫を思ひ出しては、油繪の蜘蛛の巣も綺麗に拂ひ、お種の寫眞も亦大切にして眺めた。

四月に入つて、上野や江戸川の櫻が綻び初めて、人は陽春の行樂に耽け行く時分になると、柳之助は唯だ長閑な心になつて、三日置き位に榮子の元へ通つた。

此の變化した柳之助の有樣を、葉山が見てほく〳〵喜んだ。お種も流石に重荷を卸した樣な氣持のせぬでもなかつたが、段々墮落の淵へ深入して行きながら、それを知らずに居る初心な柳之助を、氣の毒とも可愛相とも、何とも縱ひ難ないはら〳〵した氣で眺めて居た。そして幾何口をきいても、幾何すゝめても、一向計略らしいことをもせずに、唯〳〵呑氣に悠長に構へて居る良人を、もどかしくも小憎くも思ふのであつた。

今日は日曜で、而も花曇の生暖い日和であつた。久し振で讀書した前夜の疲れで、ぐつすり寢込んだ柳之助は、十時頃辛つと眼を醒した。彼は顏を洗つて口を漱いで、飯を濟して後、大分無沙汰した葉山へでも行つてみやうかと考へて居たとき、宿の女房さんが口元に微笑を浮べながら上つて來て、「松野さんと仰有る、御婦人の方がお見えになりました。」と言つた。

「松野……。」

柳之助は不思議さうに首を傾げて、凝つと考へ込んだが、然う云ふ女には一向的がないので、

「どうも解らん……什んな女ですか？」

と女房さんに訊いた。

「大相好い御容貌で御座いますよ。お髪はハイカラで二十二三位の……御心當が御座いませんですか？」

「人違ひぢやないでせうか……。」

「豈夫、其麼ことも御座いせんでせう。瞭然と鷲見先生へお逢ひ申したいつて……然う有仰いましたから……。」

「はあ、左樣ですか。ぢや生徒の家から來たのかも知れないです。兎に角通して下さい。」

柳之助は迷惑さうな顏をして言つた。

女房さんは頷いて下へ行つた。

間もなく上口の所で、

「御免下さい！」

と言ふ聲がした。

其の聲はさびのある而も透ふる樣な響を有つて居た。柳之助は何だか今初めて耳にする聲ではない樣に感じた。

彼は出迎へるつもりで、直つと起つて、上口の紙門を啓けた。

其の途端に、女は下を憚つた低い調子で、

「ばあ……。」

と言つて、柳之助の鼻先へ顏を出して莞爾笑つた。

女と云ふのは、大島お召の重に、鳩羽鼠の紋羽二重の羽織を着た、光澤の好い髪を大廂に結つた、派出な女學生の風姿に化けた榮子であつた。

餘り思ひ設けない事實なので、柳之助は駭然として眼を睜つた。

「如何したのだ……。」

「すこし相談があつて來たのよ。だけど、お邪魔して濟まないわねえ。」

榮子は柳之助の手を握つて二三度打ち振つたが、

「まあお坐りなさいよ。偶に來たのに、そんな嫌な顏をなさらないでさ……。」

と、大に當惑して、座敷の中央に棒立になつて居る柳之助を、無理に火鉢の向ふに坐らせた。而して氣詰りさうに眉を曇らして、陰氣な日當の惡い部屋の中をじろ〳〵見廻した。

柳之助は、榮子と逢つたのは決して惡い氣はしなかつた。惡い氣はしなかつたが、落ち附いて榮子を迎へる氣にはなれなかつた。彼は腹の中で恁う思ふた。葉山は粹人で永年藝妓などと親しんでは居るが、未だ嘗つて自宅へ押しかけらるゝ樣なことはなかつた。自分は僅に二三ヶ月しか遊ばないのに、恁う馴々しく宿へなど押しかけらるゝとは、どうした譯だらう。葉山に見識があつて自分に見識がないのだらうか、榮子は自分を同みし易すい甘い人間だと、馬鹿にして居るのではなからうか——今一つは、什んなに化けても、衣服の着こなしや言葉の綾で、直ぐに藝妓だと云ふことが釋ると、何時か葉山は自分に語つたことがある。下の女房さんの樣に、眼の早い口の達者な浮世馴れた人は、佶度此の榮子を一と眼で藝妓だと知つたのだらう。そして自分を彼是噂して笑つて居るだらう。何だか恥しくつて顏向が出來ないやうな氣がする——今一つは、今日は日曜で花見日和である。何時か上野へ散歩がてら、君の宿へ行かう、葉山は恁んなことを言つて居つた、今ひよつこり葉山にでも來られたら、什う云つて申譯したら好からう——柳之助は氣が氣でなかつた。

榮子の方では恁んなことを思つて居た。何時も逢ひたくつて、堪らなさうに通つて來るものを、今日に限つて、人がわざ〳〵訪ねて來たと云ふのに、世界中の苦が虫を獨で嚙み潰ぶした樣な顏をして居る。眞度に變な人だ。自分も變だけれど、自分よりももつと變だ。其の變なところが好さ。私は其所へ惚れつちやつた。恁んな可愛い人に、どうして葉山さんから賴まれた一件を切り出したら好いだらう——

榮子は當初、葉山から懇々賴まれた時、柳之助を手管で取扱つて行かねばならぬ人であつた。夫が一度より二度、二度より三度と重つて行く

間に、不思議にも榮子の心に、柳之助は可愛く映つたのである。柳之助の變な調子は元より榮子の好奇心を刺戟はしたが、其の上に彼の正直で實があつて、嘘と云ふものは決して吐かぬそれを又頼母しく思つたのであつた。榮子はすくなくとも柳之助を、手管にかけて取扱つて行くに忍びない樣な氣のする人となつた。

「内證で惚れちや打ち破しだよ。」

是は彼の夜葉山の榮子に言つた串談だが、今の榮子には其の串談も、一歩進めば眞實になりさうであつた。

其處へ昨夕葉山が來て、もう時が來た、約束通り柳之助の下宿へ行つて、隨分大げさに持ち掛けて呉れ――恁う頼まれたので、榮子は實は困つたのであつた。

約束は約束だから、什うしても果さずに濟む譯のものではないけれど、折角是迄最負にされて來たものを、今心にも無いことを言つて掌返しに愛相をつかされて了ふのも、何だか榮子には怨襟かつた。悲しかつた。夫れと同時に、どうせ言はねばならぬものだつたら、柳之助は此の話を眞に受けて、葉山の相談も諾かずに、では一生お前を世話してやらう。然う云ふ氣になつて呉れゝば好い。此の人の爲に一と苦勞して見たいやうな氣もする――榮子は恁んな大な望を内々抱いて來たのでもあつたが、迚もそれは覺束ない、此の人には恐らく夫程の熱も膽玉も餘裕もありはしまい。矢張恐れて逃げを言ふに違ひない――榮子は恁うも考へて心細くもなるのであつた。

榮子は家を出る時も、絶えず此の事件を苦に病んで來たのだが、什うしても思ひ切つて言ふより外途はなかつた。で、言つて了つてから、其の時の樣子で、あとで又どうともなるだらう。榮子は恁う諦めを附けて、柳之助の下宿を訪ねたのである。

「相談があるなら、手紙を越すと僕が行つたのに……困るぢやないか、

下でも變に思つてる樣子だし、又ひよつと葉山君にでも來られると……。」

柳之助は上眼遣ひに榮子を見て言つた。

「あら、膽ッ玉が小さいわねえ。そんなことが氣になつたの……。」

榮子は呆れた樣な調子で言つたが、

「大丈夫よ。葉山さんなんか來やしないことよ。よしんば來たにした處で、何も惡いことをしてるぢやなし、然うびく〳〵するにも當らないぢやありませんか、又下のお女房さんだつて然うだわ。二階のお客へ女が逢ひに來つて、格別不思議に思ふ譯もないぢやないの。それとも貴郎が、お女房さんと好い仲にでもなつてるなら、ちつとは具合も惡いだらうけど……。」

と、莞爾りした。

「莫迦なことを言つちやいかん！」

柳之助は怒つとして言つた。

「あら、怒つたの……氣が早いのねえ。誰も然うだとも言つてやしないのに……。」

「しかし、串談にも、そ……そんなことは言つちやいかんよ。」

柳之助は辛つと氣を直した。

「では、そんなことが無けりや、變に思つたつて關はないぢやありませんか、貴郎は男の癖に、眞度に膽玉が小さいわねえ……。」

榮子は、言ふだけのことは飽迄も言はねば　氣が濟まないと云つた調子であつた。

柳之助は苦い顏をして、夫には何とも言はなかつたが、

「相談とは……相談と云ふのは……。」

と、小間してから、恁う吃つた樣な早口で訊いた。

榮子は眤ッと柳之助の顏を見たが、

「驚見さん、貴郎は眞面目で私を贔負にして下さるんですか。それとも

一時の酔狂で……私はねえ、其のことを聞かないうちは、御相談が出來ないの……。」

と、然も甘へた樣な態をした。

柳之助はぐつと行詰つたが、眼を大きくして、

「何故……何故そんなことを訊くのだ？」

「何故でも、まあそれが聞きたいのよ。それを聞かないと、私の心を貴郎に打ち明けられないんだから……。」

榮子は又繰返して言つた。

「そりや眞面目さ……。」

柳之助は恐る〳〵言つた。

「おや、眞面目で……それなら眞度に嬉しいんだけど……。」

榮子は莞爾りして、

「でも、貴郎は佶度吃驚なさるわ。含さうか知ら……。」

「着衣でも欲しいと云ふのか？」

「憚りながら衣服なんか慾しがる樣な榮子ぢやありませんよ。」

「ぢや指環か……。」

榮子は、柳之助に恁んな無邪氣な問ひを起さるゝだけ、それだけ胸を打ち開けるには忍びなかつた。打ち開けたら什んな顏をするだらう、どんな氣がするだらう。榮子は喉元まで出かゝつて居るのを、ぐつと呑み下して堪へて居たが、遂ひ思ひ切つて、

「貴郎、一生のお願ひだから、私を……私を落籍して下さらなくつて……。」

「なに、落籍して呉れつて……。」

柳之助の顏は急に蒼くなつた。そして息が喘んだ。

（二十一）

葉山は今日の日曜を、朝から二階で暮して居た。寢轉んで雜誌を見たり、欄干に靠れて朧に霞んだ三國一の富士の姿を見たり、それが飽きると庭園の花を下瞰したり、植木鉢の手入れをしたりなどして、實は同僚の二三人が、飛鳥山へ花見に行かうと誘つたのを、無理に斷つて恁うしてぶら〳〵して居た。彼は柳之助の蒼くなつて飛んで來るのを、心待ちに待つて居たのであつた。

柳之助はお晝過になつても來なかつた。

「どうしたのだらう。彼程堅く約束して置いたから、榮子が行かない筈はないが、榮子が行つたら、鷲見先生は飛んで來ない筈はないが……。」

葉山は何遍も恁う呟いて待つて居たが、それでも待人は姿を見せなかつた。

「妙だ……實に妙だ……豈夫情死と洒落て譯でもあるまいが……何しろ不思議だ。姫松の話では、榮子は此の頃、鷲見に對する調子が、何だか變になつたと云ふが、不知氣の毒になつて手品の種明しをやつたのでは、夫で鷲見先生が怒つて來ぬのではなからうか。」

葉山は恁うも考へて、何だか心配になつて來たが、

「いや〳〵。彼の女に限つて、そんな不實なことはしない筈だ。間違ひなく今日午前中に行くつて、然う此方に宣言したから、榮子は行かないこともあるまいが、若し鷲見が留守ではなかつたらうか。夫れで要領を得ずにしまつたのではなからうか。今まで來ないのを見れば、或は然うかも知れない……。」

其のうちに三時が打つた。それでも柳之助は來なかつた。

お種は梨實を盆に乘せて上つて來た。

「貴郎。今日の樣なお花日和に、さうして家に靜止として入らつしやるのは、お珍しいぢや御座いませんか。」

と微笑しながら良人に言つた。

葉山も笑つて、

「餘り外ばかり歩いて居て、お前にも氣の毒だから、今日は終日謹慎するつもりさ。」

「あんなうまいことを仰有つて……。」

お種は梨實をむいて良人に侑めたが、

「貴郎に然う云ふ實が御座いますかしら……。」

「ないこともなからう。恁の通り謹慎してるから……。」

「では、後生ですからお障子を貼つて下さいましな、御覽の通り、茶の間や座敷のが大分穴が明きましたから……貴郎が先頃お土産に買つて入らしつたサーベルが御座いませう。あれを保が面白半分に振り廻すんですもの、堪つたものでは御座いません……。」

「そりや氣の毒だつたね。しかし保が勝手に破いたものを、俺の方へお鉢をもつて來るとは不服だね。保に貼らせろ……。」

葉山はにや〳〵笑つて居る。

「まあ、そんなことは有仰らずに……どうかお願ひまをします。切貼だけは何時でも私が致しますけれど。貼替は私には出來ませんですから……。」

「俺はお前より下手だよ。」

「はい。下手で入らしつても結構で御座います。」

「あとで皺だらけになつて、御隱居のお顏の樣だなんてこぼしても知らないせ。」

「はい。決して然う云ふ惡口は申しませんから、何卒……。」

「畜生奴！到頭押し附けやがつたな。恁うなると謹慎も滅茶〳〵だ。情ないな……。」

「でも、運動になつて、晩の御酒がお美味く召し飲がられますよ。」

「お爲めこがしは恐れ入るね。ぢや貼つて遣るから、ちやんと障子の紙

を捲しつて、それから糊を作つて、新しい紙を供へて、刷毛と小刀を揃へて置いて呉れ。」

お種は呆れた樣な顏をして葉山を見たが、

「大方そんなことと思つて居りました。なんなら序に、お袴と御紋附を用意致しませうか。それぢや、まるで殿樣のお障子貼ぢや御座いませんか、貴郎はもう……。」

「俺だつて殿樣にや違ひないが、羽織袴で貼る口とは、すこし許り格に差があると云ふ皮肉だね……しかし、お前も近年、大分口が達者になつて結構だ。改めて拙者奴、其處へ惚れ申した……。」

お種は諦めた樣な顏をして下へ行つて了つた。葉山は氣の毒になつて續いて下へ行つた。而して兎に角障子を貼初めた。

四五枚の障子が貼りあがつた頃、電氣がパッと燈いた。

お種は見違へる樣に座敷が綺麗になつたと言つて、非常に嬉しい顏をして良人に謝した。葉山も惡い氣持はしなかつたが、日が暮れても姿を見せぬ柳之助のことが、氣がかりで氣がかりでならなかつた。

「鷲見はどうしたらう……。」

恁う葉山は一吹喫ひながら獨語した。

傍からお種が聞き附けて、

「おや、今夜鷲見さんが入つしやるので御座いますか？」

と良人に訊いた。

「實はね、今日夫が爲に謹慎して待つて居たのさ。お前には未だ言はなかつたけれど……。」

葉山は短簡に事件の要點をお種に語つた。

「まあ、然うで御座いますか……今晩入らつしやるお心算かも知れませんねえ。」

「さあ、然うかも知れない。」

是から晩餐が始らうと云ふ處へ、柳之助はあはだゞし氣にやつて來た。

「大變な事件が起つたので、君の相談を借りに來たよ。」

柳之助は悄れた顏をして、息を喘せて言つた。

葉山は內心大悅びであつたが故意と驚きの眼を睜つて、

「大變な事件と云ふと、君の生死に關する程の重大問題だな。急に起つたのか……。」

「お晝時分に起つたことだがね。實に意外の事件で、僕は驚いて了つたのさ。」

「宜しい。某の智慧で解決の出來ることなら、幾何でも相談は受けるが……時に君は未だ飯前だらう……。」

「さうだ。しかし飯なんか什うでも好いよ。」

柳之助は非常く落ち附かずに、そは〳〵して居つたが、葉山は惡るく落ち附き拂つて、

「君は什うでも好からうが、俺の方は然うはいかんよ……。」

「ぢや、早く食り給へ。僕は待つとるから……。」

「待つてなくとも、一所に食つたら好いぢやないか……何は兎もあれ、二階へお引き越しだ。奧方、宜しく賴むぜ。」

「今お道具を運んで參りますから、まあお二階へ行つて入らつしやいましな……。」

お種は恁う言つた。

「さあ、君二階へ行かう。」

葉山は恁う言つて起ち上つた時、今迄で何の氣もつかずに居たが、柳之助は外套も脫かず、帽子も冠つたまゝで居たので、

「おい〳〵。ひどいぢやないか、いくら大事件かも知らんが、葉山邸を大道と間違へちや……。」

恁う咎めたが、其の實俺の方でも可也慌てゝ居たのだなと思ふと、不

知ぶつと噴飯して了つた。

「やあ、是は失禮……。」

柳之助は苦笑しながら、外套と帽子をとつて茶の間の隅に置いたが、直ぐに葉山の後に尾いて二階へ上つて行つた。

二人は火鉢を圍んで、酒を呑みながら語つた。

「で、什んな事件かい。」

葉山は柳之助に猪口を献しながら訊いた。

「今日突然榮子が下宿へ來たのだ。僕は實に吃驚したね……。」

柳之助は猪口を取つて一口飲んで、それから言葉を續けやうとした時、

「榮子が下宿へ來たつて、それ程驚くにも當らんが、榮子が何か難題でも君に言つたのか……。」

と葉山の方から訊いた。

「それが大事件なのさ。榮子は落籍して呉れと言ふのだ。」

「何だつて……落籍して呉れつて、そりや大變だね。仰の如く大事件に違ひない。」

葉山は仰山らしく眼を睜つた。

「如何したら好からう。彼云ふ大膽なことを言ふ迄には、彼の女も隨分決心したことだらうし、それを所由なく斷つたら、屹度僕が恨まれるだらうな……。」

「恨まれたつて管ふこつちやない。斷るさ。斷るより外途はない。成程君は彼の女を嫌ひぢやなからう、嫌ひぢやなからうが、なんと言つても藝妓ぢや仕方があるまい……で君は榮子にどんな返言をしたのかい……。」

「僕の一存ぢや即答が出來ないから、葉山君と相談する迄まつて呉れと言つたのさ……。」

「それぢや斷つたら、俺が惡者になつて了ふ譯だな。宜しい、惡者にさ

れたつて管はうことはない、斷つて了ふさ。」

「しかし、榮子は恨むだらうな……。」

柳之助は　ひどくそれを心配して居るらしかつた。

「恨んだつて好いぢやないか、藝妓なんかに恨れるのがそれ程怖いのか、ぢや落籍して細君にするが好い。」

「そんなことは出來んよ……。」

柳之助は恁う葉山の言葉を彈く樣に言つたが、直ぐに又悄れて、

「しかし、彼れ程熱心に言ふのを見れば、餘程僕を思つとるに違ひない。それを無情に斷つて了つたら、佶度彼の女は泣くだらう。失望するだらう。先程別れる時分にも、若し貴郎に斷はられたら、私は生きて居ないつて、彼の勝氣の妓が、めそ〳〵涙を滾ぼして泣いたのだ。實に可愛相になつて僕も泣いたのだ……其れを無情に斷るのも……。」

と嘯つと溜息を吐いて、彼が悲哀に打たれた時、好く表はすところの眼をパチ〳〵させた。

「おや〳〵。こんな場合にお惚けとはひどいね。君にそんな未練が殘つてるなら、どうとも君の勝手に處分するが好い。僕は知らないから……。」

葉山は怒つた顏をして見せた。

柳之助は驚いて、

「君は怒つたのか……僕は何も未練を言ふ譯ぢやない、唯だ事實を告白しただけだ。」

「まあ好いさ。そんなに辯解しなくとも……。」

葉山は又言葉を軟かにして、

「君はまだ彼云ふ社會の眞底まで陷落ちて見ないから、直ぐに妓の云ふことを信じるが、榮子の今度君に持ち出した樣なことなども、實は彼の社會の普有事件なのだ。輕いのは衣服や指環の無心で事がすむけれど、重いのになると今の樣な落籍と云ふ奴だ。君は其の重いのに科せられた

のさ……。」

恁う杜撰を言つたが、

「それもね、其の重い奴に科せられるのも、重に獨身者に限られて居る。要り向ふぢや對者の男が獨身だと云ふので、馬鹿にしてかゝるのだね。若し今君に妻君があつたとしたら、彼等は唯だあつさり遊んで、決して今日の樣な難題は提出しないから……。」

「さう云ふものかね。」

柳之助は感心して聞いて居る。

「處が唯だ此處に困るのは、無妻で居て彼の女の要求を斷ると云ふことだ。彼等の通有性として、そんな薄弱な理由ぢや、却々もつて承諾せんのだ。まかり間違へばのこ〳〵押しかけて來て、私は貴郎の妻だわなんて、納り返へつて、挺でも動きやせんのだ。然う云ふ例は僕は幾何もみて居る。殊に彼の榮子と云ふのは、彼の社會でも有名な變り屋で、熱情

がある代り隨分思ひ切つたことをする女でね。今度だつて、君が獨身でお　まけに下宿生活と來てるだらう、君の決心如何によつては、明日にも明後日にも、押しかけ女房を極め込んで來ないとも限らんのだ。本來彼の女は、君も餘り嫌やではないらしいし、又女の方でも君を好きらしいし、思ひ切つて細君にしても好い譯だが、何しろ先方は藝妓なんだ、泥水活業に永年の憂身をやつした藝妓なんだ。いや藝妓だつて娼妓だつて、當人同人さへ好き合つたら、誰の干渉も受けずに勝手に夫婦になれる譯だが、それぢや君の良心が許さんだらう。又正直のところ僕だつて不同意だね。更に學校の同僚にも肩身が狹くなる、おつと大變なものが控へて居つた、それお類さんの實家の母親……彼の母親なんかに知られてみろ、驚見柳之助君の全人格が立所にゼロだね。以上の樣な理由で、君は所詮彼の妓を妻君に据ゑることは出來んのだ。さあ、話が然う押し詰つて來ると、榮子に對して、何か拒絶の方法を講じなくてはならぬと來る。

處がそれ程君に執心してる程なら、到底手切金の百や二百では埒が飽かんと來る。いや彼の女の氣性ぢや、金で思ひ切らせるなんかは愚の極だね、寧ろ愚の愚の愚の極かも知れない……。」

葉山は何時もの調子に似ず、首を傾けたり、目を細めたり、腕を組んだり、口をゆがめたり、溜息を吐いたり、有りと有らゆる苦考の狀態を示したが、

「もう仕方がない。狂げてしまひ給へ。それより外策はなしだ。もう種切れ〳〵。」

恁うがつかりした樣に言つた。

今迄で葉山の言葉を、身に浸みた樣な風情で聞いて居た柳之助は、

「狂げろと云ふと……。」

と葉山に反問した。

「獨身主義をさ。此の際思ひ切つて妻帶して了へと云ふことさ。それより外施すべき術がない……。」

「妻帶！そりや困るな……。」

柳之助は顏をさつと蒼くした。そして顫ひを帶んだ聲で言つた。

「今更困つても困るぢやないか。君は榮子と關係した當初に於いて、既に今日あるを覺悟して居た筈ぢやないか。」

「そんなことは、覺悟なんかしとるもんか。僕は夢にも知らんとだもの。それに君は、遊ぶと僕の鬱積した氣持が快る、光るい世界に出ることが出來る、恁う熱心になつて勸めるもんだから、僕も實は其の氣になつて遊んだ迄さ。處がお蔭で此の頃は餘り悲觀にも陷らなくなつて、體にも元氣が出て來たので、僕はこれは君の賜物だと思つて、陰ながら感謝しとるよ。たゞそれだけの事實さ。處が今度突然こんなことが勃發して來たので、僕は實に當惑しとるのだ……。」

「さあ大變になつて來た。さう君の樣に言つて了へば、何も彼も僕が皆

惡者になる理窟だが、しかし初め君に遊べと言つたのは決して個人の榮子と肉的關係を結べと云ふ意味ぢやないよ。好いかね、此處が難解しいのだ。一般の藝妓を對手に、仇な口でもきいて、酒を呑んで氣を晴せとの意味であつたのさ。若し君に肉的情交を與へやうとしたのが、僕の目的であつたと假定したら、僕は、立派に看板をかけて居る、娼妓と云ふものを、君に提供するのさ。何を苦しんで藝妓なんか、そんな迂遠いことはしやしない……それに君は平素非常に道德堅固と來てるだらう、たとひ彼云ふ社會に親しむやうになつたとしてもだね、肉的情交を結ぶやうな、そんなことは萬々あるまい、いや決してない――僕は恁うした強い自信を有つて居たのだ。處が圖らずも道德堅固の君はまんまと榮子の誘惑に乘つて了つた、誘惑に乘つたのは要り君の洒落さ。俺の知つたこつちやない……。」

葉山は頗る拙い辯解をしたが、此の無邪氣で正直で、佛樣の樣な驚見を籠絡すると云ふことは、實に一大罪惡だな――彼は恁んな考へもして恐れるのであつた。

「成程、君の云ふことは尤だが、しかし今更どうも致方がない……。」

「致方がない困つたで濟まされる問題ぢやないから、早く妻君を貰はうことにしなくつちや非だね。恁う云ふことが人間の一生一代に、何時肉薄して來るかも解らんことだから、僕は先きに君に對して妻帶を勸告したんだけれど、君は彼の通り、小說みたいな悲哀な文句を熾に羅列して、僕の善意な勸告を情なく退けて了つたらう。ね。天罰は覿面で、怖かないのは由來鬼の面と相場が極つたもんだ……。」

柳之助は眼を瞑つて默考した。

灰色の雲がまた柳之助の心を蔽ふた。暗い淋びしい、絕望の戰慄を有つた凋落の秋が、また柳之助の身を傷ましめた。

彼は此の新なる悶えを、什うして其身から消却させやうかと思つた。

榮子を懷しんで、而も榮子の要求を甚く恐れた彼は、破り難いお類への誓言を敢えて破つても、意の滿たぬ妻を貰はなければ、安心の出來ない境遇に迎へられたのであつた。而して其の貰つた妻から受くる報酬も、實に懷しい榮子の要求を卻けると云ふ、不愉快な意味に歸着するだけであらうとは、何と云ふ悲慘なことであらう。何と云ふ哀れな境遇であらう。思ひ切つて妻を貰つたら、榮子は泣いて自分を恨むだらう、慟哭して身を慨くだらう――其のいぢらしい光景が、繪の樣に柳之助の胸を往來した。而してそれを他に視ながら、良心の許さぬ新妻と同棲するときの苦痛を想像して、彼は堪へられない樣な氣持がした。

「寧ろ妻も貰はず、榮子の要求も卻け、そして何處か遠い外國へでも行つて、身をかくして了ひたい……。」

柳之助は恁んなこと迄思つた。で、何方とも決しかねて居た時、

「さあ何うだい。何も然う今更考へる必要もないぢやないか。決心して新しい妻を貰はうか、但し又有ゆる周圍の壓迫に反抗して――孤立の姿で榮子を要求通り世話してやるかの、此二個しかないのだもの……。」

葉山は恁う促す樣に言つた。

「其りや然うさ。」

「ぢや、何も躊躇することはなからう。……榮子を世話する氣か？」

「其樣ことは、什う考へても出來んことだ……。」

「然うだらう……ぢや、妻を貰はうことに決心したんだね……。」

柳之助は默つて應へなかつた。

「おや、其れも嫌やなのか。」

葉山は言ひ疲れたと云ふ顏をして、吽つと溜息を吐いたが、

「君はもう駄目だ。まるで女の腐つた樣な男だ。俺は十何年君と交際して來てるが、よもや此程迄君を不得要領な、膽玉の小さい人間だとは思はなかつた。もう何に限らず御相談は、今夜限りお斷りだ。什うとも君

の勝手にし給へ……。」

と、然もいま〳〵しさうな口調で言つた。而して恁う嚇したら、何とか音を出すだらう――葉山は眤ッと柳之助の顔を視た。

柳之助は、其の葉山に見られた顔を次第に垂れて、矢張り何とも言はなかつた。

葉山も氣の毒になつて、柳之助の猪口に滿々と酒を酌いでやつたが、今度は優しい調子で、

「君は何故さうだらうね。すこしはき〳〵男らしくしなくつちやいけない……。」

「どうして僕は恁う云ふ人間だらう……恁んな不幸な境遇に許り陷るだらう……。」

柳之助は辛つと首をあげて葉山を視た。眼には涙が含んで見えた。

「何遍も〳〵言ふことだが、其の不幸な境遇も要り君自身が作るのさ。具體的に言へば、君の所謂獨身主義だとか、お類さんへの誓言を莫迦眞面目に守つて居る、それなどが蛹を造くるのさ……いやそれで思ひ附いたが、君の體は此の場合、そんなことを苦慮する必要はなくなつて居るのだよ。君は既う榮子と云ふ藝妓と肉の情交を結んで了つたらう、それがたとひ一時の誤りとしてもさ、最早死者に對する誓言を破つて居る道理ぢやないか、と僕は思ふね。女性の肉體に接れても、妻さへ有たなかつたら夫れで好いと云ふ樣な、そんな薄弱な獨身主義なら弊履の如く棄て了ふ方が增しだね。いや、明に君はその獨身主義――お類さんに對する誓言を破つて了つたのだ。君の體はもう汚れて再び復らないのだ。それを御存じなしに、潔白らしく妻帶を拒むなどは、何のことはない既に臭味ある葱それ自身が、大蒜の臭味を恐れるやうなもんで、莫迦〳〵しいよりは、寧ろ滑稽ぢやないか。なに躊躇は無用、一刻も早く妻帶することに決めるさ。其の方が寧ろ男らしい仕打ちだよ……。」

柳之助は非常な勢で猪口をとつて、呷いと一口に飲んだが、

「もう何うでも好い……何うなつても管はん！　ぢや君の説に從つて妻を貰はうことにしやう……。」

と、然も決する所あるものの樣に、猛然として言つた。

「なに、貰はうことに極めたづて……武士に二言はあるまいね。明日になつてから、又嫌やになつたなんて、自殺の小説を書いて寄しても、最う〳〵俺は承知せんぞ……。」

葉山は、面白くて〳〵堪らぬ樣な氣になつたが、うんと堪へて恁う念を押した。

「大丈夫だ！　一旦君に宣言した以上は、僕も男だ。決して變更はせん……。」

柳之助はきつぱり言つた。

「萬歳〳〵！　然う來なくつちや嘘だ。是れで先づ辛つと俺の苦心の手品も……いや努力も成功したと云ふもんだ。改めて祝杯を献じやう。」

葉山は滿面唯だ喜の笑を湛へて、柳之助に猪口を差した。而して何だか裸踊でもしたい樣な氣持になつた。

（二十三）

葉山が矢崎家を芝に訪ふたのは、明くる日の夕方であつた。

圓い軒燈の附いた冠木門を這入ると、左側に奥まつた玄關の横まで低い枳殼の垣が續いて、垣の中は二十坪餘もある小綺麗な庭になつて、色の褪めた、大分散りかゝつた牡丹櫻が二三本植つて見えた。葉山は何氣なく垣の上から庭を覗いた。すると其所には、鮑貝を伏せた樣な小形の髷を結つた、色の淺黑い道子の母の民子が、背に一ばい夕日を浴びながら、張板から切片を剝して居るのを見た。

「おばさん、相變らず御精が出ますね。」

葉山が恁う言葉をかけると、民子は一寸垣根の方を向いて、驚いた顔をしたが、

「まあ、誠哉さんぢありませんか、眞度にお久し振りですことねえ。さあお入りなさい……道子　富士見町の兄さんが入らしつたよ。」

民子は恁う言つて、急いで縁側から座敷へ上つた。

葉山が玄關で靴を脱いで居ると、アタフタと道子が出て來て、

「まあ、義兄さん。好く入らしつたことね。」

「ちよつと急用で來たが、おぢさんは御在宅かね。」

「生憎留守ですわ。今日お晝過から、謠會があつて大森まで參つたのよ。今夜は遲いでせう。」

「さうか、それは殘念だつた。しかしおばさんでも、用便が足りる事件だから、まあ好い……。」

「然う……。」

道子は不思議さうに葉山の顔を見たが、すぐに外套と帽子を受け取つて、夫々仕末を附けたが、

「さあ、義兄さん何卒彼方へ……」

其所へ民子も懷しさうにして出て來て、葉山を奥の八疊の客間へ導いた。

挨拶が濟んで、煙草盆が出て、軈て道子はお茶を運んで來たが、何か用あり氣に茶の間の方へ下つて行つた。

民子は熟〻葉山を見て、

「誠哉さんにもお久振りだけれど、此の頃お種はどんな鹽梅なんですか。昨年の暮時分から、一向顔を見せませんがねえ、えゝ、さうですか、保さんは相變らず、えゝ、まあ眞度にねえ　是から段々戯が激くなるんだから……でも蒼い顔をして、始終お藥を頂いてる樣でも困りますからねえ……おあとは未だなんですか？」

「何だか少々許り出來たらしい樣子です。此の間も御飯の匂が鼻につくなんて言つて居ましたから……。」

葉山はにや〳〵笑つた。

民子も笑つて、

「おや、それはお目出度う。矢張りおあとが出來ないとねえ、一人ぢや淋びしいから……。」

話は小間途切れた。

其うちに日が暮れて瓦斯が燈いた。

何もお肴はないけれど、是は誠哉さんには一番の待遇だと云つて酒が出て來た。

葉山が酒杯を五六度重ねた時、何か誂へにでも行つたのか、道子が外へ出たので、此の機會を利用して相談しやうと、葉山は改つた調子で、

「實はね、今日參つたのは、道子さんの緣談に附いてですがね……。」

「えゝ。何處か好い口でも……。」

と民子は心持眼を睜つて葉山を見た。

葉山は貫ひたいと云ふ當人の身の上や、家系や學歷や、收入や、性格や、渾て周圍の事情を詳しく物語つて、

「此の男のことは、描家で道子さんも逢つて知つてる筈ですから、後で聞いて御覽になれば好く解りますが、何しろ非常な謹直家で、私の友人中でも實に珍らしい人間です。何卒ひとつ至急に御相談を願はれますまいか……。」

「えゝ。然う云ふ方なら、望んでも得られない良い御緣ですよ。私なら直ぐにも差し上げたいけれど、一應正義――民子の連合――にも相談しないといけないことですから……。」

民子はひどく乘氣になつて言つた。

「實はね。向ふにもまだ二人程候補者があるさうですが、それは大變急

いで居るので、善にも惡にも明後日の晩まで、返事を出さなくつちやいけないことになつて居ますから、甚だ勝手がましいお願ひですが、おちさんがお歸りになつたら、明日にも直ぐ御返事を下さる樣にお願ひします。當人も道子さんなら、大變好いつて、非常に望んで居りますので……。」

「えゝ。歸へれば、今夜にも相談して直ぐお知らせ致しませう。元來道子の一身は貴郎にお任せして置いた程なんだから、今更私達が彼是云ふにも當らぬことですけれど……。」

民子は恁う言つて笑つた。

道子が歸つて來て間もなく、新規な料理が出た。葉山は盛に待遇れて、可也酩酊の體であつたが、其の夜の九時頃呉れ呉れも願の筋を賴んで、矢崎家を辭して歸つた。

葉山は其の足ですぐ電車で柳之助の宿へ行つた。

翌日葉山が會社から退けて來た時、正義老人から返書が屆いた。葉山は胸を轟しながら封を開くと、貴郎を信じて差し上げることに極めたから、萬事宜しく賴むと云ふ意味を書いてあつた。

「奥方〳〵。早く來てみろ！」

葉山は元氣の滿ちた聲で。臺所で何か料理をして居たお種を呼んだ。

お種は良人の呼聲が餘り仰山なので、何事だらうと急いで茶の間へ來ると、葉山はお種の顏を視てにや〳〵笑ひながら、默つて正義からの手紙をのべて、讀んで御覽と言つた。

「おや、返事が參りましたねえ。」

お種も眼を輝してそれを讀んだが、

「まあ、宜かつた。是でもう私は安心致しました……。」

「何うだい。俺の手際は……何時も莫迦な眞似はして居るが、いざ鎌倉となりや恁んなもんだ。恐れ入つたか。」

「はい。恐れ入りました。」

お種は苦笑した。

其れから葉山は、日取のことや、結納のことなどを相談の爲めに、是から柳之助の宿へ行かうと、早めに食事を濟して、一吹喫つてゐる所へ、ひよつこり柳之助がやつて來た。葉山は喜び迎へて、

「今君の宿へ行かうと思つて居た所なのさ。まあ幸ひだつた……。」

「さうか。返書が來たのか……。」

柳之助はひどく落ち附いて訊いた。

「色男奴！　到頭道子を占めて了つたな。」

葉山は柳之助の心を誘るやうに言つたが、

「今矢崎の老人から返書が來てね、然う云ふお方なら差し上げやうと言つて越したのさ。だから結婚したら、大に道子を可愛がつてやらなくつちやいけないよ。」

柳之助は頷いて苦笑したが、

「奥さん、僕も到頭こんな境遇になつて了つたです。」

とお種の顔を視て、沈んだ樣な調子で言つた。

「結構ぢや御座いませんか。何だかお睦しい御夫婦仲が眼に見える樣な氣が致します。」

お種は恁う言つて、口元に淋しい微笑を浮べたが、餘り嬉しさうにも見えぬ、寧ろ沈んで居る柳之助の有樣を視ると、何だか其の心に淡い悲哀を感じずには居られなかつた。而して柳之助を氣の毒な人だとつくづく思つた。

「まあ、そんなことは如何でも宜いぢゃないか。夫婦になつたら、お互に可愛がられたり可愛がつたりするのが當前だもの。驚見だつて然うしなくつちや非さ。」

葉山は柳之助に茶を侑めて、

「時に結納だか、普通が貳拾圓、中が參拾圓、上等になると五十圓も百

圓もあるが、什うだい、中の部の參拾圓と極めたら……先方ぢや可也生活が好いから、あまり吝なとこもされないしね。」

「僕は何も解らんから、一切君の指示に從ふより仕方がない。何卒か君の好い樣にして呉れ給へ。しかし式の費用は何程かゝるだらう、僕の現在の持合せは八九拾圓しかないのだがね……。」

柳之助は不安さうに葉山に言つた。

「金のことは心配御無用さ。及ばずながら月下氷人の某どうにでもするから……あとで君の懷中に餘裕が出來たら、月賦にでもして返して貰へば有難き仕合せなのだ……。」

「濟まんな……それぢや濟まんな……。」

「何だい。他人行儀な……。」

葉山は叱る樣に言つたが、

「それから、式は大急ぎで、今日から一週間目、つまり土曜日の午後四時、日比谷の大神宮で擧げることにして、式が濟んだら、君の新宅へ一同引き揚げて、其所で披露の宴を張る。

ね、こんな順序なんだ。異存はなからう。」

「そりや好いさ。しかし一週間とは隨分急ぎやないか、僕なら何時でも管はんが、向ふではそんなに急ならば困るだらう。」

「ちつとも困らんよ。道子の嫁入仕度は、もう昨年の秋時分から出來てるんだ。それに此の手紙にも、何時なりと差し支へないからと書いてある。さうだ、婿殿に見せるのを忘れて居つた。」

葉山は長火鉢の抽出から、例の手紙を出して柳之助に見せた。

「ぢや、さう極めやう……。」

柳之助は讀んだ手紙を葉山に返して、

「處で家を借りなくつちやいけないが、何の邊が好からう……。」

葉山は笑つて、

「もうちやんと借りて置きました。おまけに女中附だよ。」

柳之助は眼を大きくして、

「なに借りて置いたつて……そりや有難い。實に有難い。しかし君は隨分氣が早いね。未だ極りもしないうちに。家を借りるなんて……。」

「なに氣が早いもんかい。是が普通さ。君の樣に火事が隣まで來てから、急に道具を運ぶやうな迂遠なことぢや、此の活動の社會に生息が出來るもんか……そんなことはまあ餘計なこつたが、實は恁うなのさ。俺の同僚の貸家なんだよ。所は牛込の神樂町、崖を前にした高地でね、下が八疊に六疊に三疊、二階が四疊半、而も南向だから日當の好いことは夥しく、憚りながら隣家の土藏の壁なんかも見えないし、穴倉のやうな暗いジメ〳〵した空氣も通はないよ。其の代り六坪許の綺麗な小庭があつて、植込みもあれば花も咲いて居る。泉水もあれば築山もあるだけさ。什うだい。氣に入つたらう。」

「餘り好過ぎるね。家賃は……。」

「驚くなかれたつた拾四圓、それに敷金なしの前家賃と來てるのさ。」

葉山は恁う言つてから、今日會社で遇然貸家の話が出て、それは好都合だとすぐに極めて置いたが、此の家は先きに矢張同僚の一人が住んで居て、自分も一二度行つたことがあるので、家の樣子は好く知つてるのだと附け加へて言つた。

「そりや種々有難う……ぢや明日すぐに引き越さうと思ふが……。」

柳之助は煙草を喫ひながら言つた。

「勿論、早い方が好いから、明日でも明後日でも越すがよからう。ところで女中だね。これは今急にと言つても、却々思ふ樣なのか見當るもんぢやないから、當分家のお時を貸すことにしたのさ。これも異存はあるまい。もう君を中傷した惡い女中達を追つ拂つて、御覽の通りの忠義者と代へてあるから……。」

「何から何まで好都合だね……どうも種々お世話でしたな……。」

柳之助は葉山に注いだ眼を、更にお種に注いで恁う禮を言つた。

「何う致しまして……。」

お種は簡短に挨拶したが、葉山に對つて、

「貴郎、それからあの世帶道具ですがねえ、かねてお預りして置いた。」

葉山はお種の言葉を中途で奪つて、

「あれは禁物！　使用すると堅く相成らず候。封の儘で永久に葉山家のお荷物さ。驚見は又神經を起すといけないし、殊に花嫁の道子にも氣の毒だから、一切新しく買ふのさ。差し當り無くてならぬ物品のみ買つておいて、あとでぽつぽつ用意さへすれば、それで結構間に合ふ譯だからな……。」

と柳之助の顏を見ながら笑つた。

お種は尤もらしく頷いた。

柳之助は、そんなことは管はないと言つたが、葉山は駄目〳〵を連發して、什うしても承かなかつた。

(二十四)

柳之助は、翌くる日の午後に牛込の神樂町へ引き移つた。葉山家から差遣の女中は、朝から來て襷がけで働いた。三時頃になると、お種と一所に道具屋が車を挽いて來た。四時近くになると葉山が來て、箪笥の据る場所を極めたり、長火鉢の位置を指示したり、床の間に葉山家秘藏の幅物を懸けたりして、兎も角も家の中は整頓した。皆は二階に上つて佛つと息を吐いた。

「さあ、是で美しい人が舞ひ込んで來たら、もう世話はない……しかし話以上に綺麗な家だらう。」

葉山は柳之助に言つた。

「さうだ。却々綺麗だ。第一此の二階の眺望が氣に入つたね。」

柳之助は應へた。

「眞度に好い景色で御座いますねえ……。」

お種も小手を額に翳して、遠く夕日の光の映つて居る、番町の堤の並木松の邊を眺つと眺めた。

柳之助は淋びしさうな眼附で、其のお種の横顔をそつと偸み見た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから一週間經つた。嫌に生暖い蒸す樣な天氣の日であつた。折々風が吹いては、色の薄くなつた花を其處でも此處でも散り亂した。三春の行樂が夢の樣に盡くされて行く此の慘ない一日は、實に柳之助が一生の運命を支配する結婚日であつた。

髮を刈つて髯を剃つて、新しい紋服を着けた柳之助を衞つた四臺の俥は、午後の三時頃葉山家の門前を出て、日比谷の大神宮へ對つて走つた。

三臺の俥は柳之助と葉山夫婦で、他の一臺はお類の生家なる桃瀬の母親であつた。お島の一件から感情の行違ひがあつて、平素柳之助とは疎遠になつて居たが、それでも知らせるのが禮だと云つて、柳之助の迷惑がるのを無理に葉山から通知した。而して豈夫來まいと思つて居たところへ、當日の朝になつて母親ひとりでのこ〳〵出懸けて來たので、今更澁い顏もされず、先は重き親類として、今日の式に列んで貰はうことにした。

一行が大神宮へ着いたのは、三時半すこし廻つた時分であつた。

長い廊下や、立派な中庭を控えた緣側を通つて、二階の控所へ案內された。控所は六疊間で綺麗な絨緞が敷いてあつた。中央には大きな圓テーブルを据ゑて、椅子が五六脚並べてあつた。四人は椅子に腰を卸して若い神官が持つて來た櫻湯を呑みながら暫く話して居た。

「私は初めて參つてみましたが、大層立派な建物ですねえ。これで日に

幾組結婚なさる方が御座いませう。」

と桃瀬の母親は、キョト〳〵した眼で四圍を見廻しながら、傍に居た

お種に訊いた。

「然うで御座いますねえ。多い時分は四組も五組もあるさうで御座いま

す。」

お神は氣の乗らない調子で應へた。

「えゝ、然うですかねえ。世の中が開けると、どんな便利なものも出來

て參りますねえ。」

と桃瀬の母親は頻に感心して居る。

柳之助は嫌やさうに其の横顔を見て居る。

葉山は又其の柳之助の横顔を見て居たが、

「おい〳〵。そんなに顰めて居ないで、すこし晴々した顔を見せないか

よ。今日は唯の日と違ふぢやないか、」

と低い囁く樣な聲で言つた。而して帶の間から金時計を出して見たが、

「最う來さうなもんだが……。」

と呟いて、椅子を離れて控所を出て行つた。

葉山は直ぐに戻つて來て、

「もう先方でも詰めかけて居る。間もなく初るだらう……。」と言つた。

十分程經つてから又若い神官が出て來て、もう初めますから何卒此方

へと言つた。

四人は廣い式場へ導かれた。婿たる柳之助は神壇に對つて右の部屋に

入れられた　嫁たる道子は同じく左の部屋に入れられた。婿側の葉山夫

婦と桃瀬の母親とは、神壇の正面の右の方へ着席した。嫁側の正義夫婦

と、坂谷と云ふ文學士へ嫁いて居る道子の姉の多賀子とは、同じく左の

方へ着席した。それから二三人の神官が衣冠束帶で恭しく出て來て、種

種なものを神壇にお供した。間もなく右左の部屋の紙門がさあと啓いて、

婿と嫁は面を見合せた。そして柳之助は介添人の神官に、道子は黒の紋服を着けた介添人の女に導かれて、兩方から式場へ繰り出した。而して右と左に別に設けてある席に就いた。髯の長く垂れた神々しい顏をした神官が、神前に對して誓文を讀んだ。それが濟むと、十七許りの髮をお下げにした、緋の袴を穿いた綺麗な巫子が二人出て來て　女蝶雄蝶のついた銚子をとつて、婿と嫁とに三々九度の盃を侑めた。それがまた濟むと、媒介人の葉山が神前に進み出て祝詞を讀んだ。

式が一段落ついた時、若い神官が一同に對して、

「暫くお控へを願ひます。」

と挨拶した。而して今度は神壇の横から直角に、左右相對した席が作られた。

「どうぞお着席を願ひます。」

神官は又一同に挨拶した。右側には媒介人を上席に桃瀬の母親、それに柳之助道子と並んで、左側には嫁側の親戚が面と對つて着席した。巫子が奥から出て來て、一人〳〵に、白木の神膳を据ゑた。神膳の上には、土器が二枚と白木の箸がついて居た。土器の一枚には、白髮昆布と結び鰨が判じものゝ樣に、ちよつぴりと載つて見えた。

巫子は銚子をとつて、各自に神酒を注いで廻つた。神官は又一同に對して、

「どうぞ御一所にお飲り下さい。」と言つた。

是は親類杯であつた。

式は終りを告げた。一同は待たして置いた俥に乘つて、五時頃神樂町の鷲見の新宅へ引き上げて來た。

其の夜は盛んな宴會が開かれたが、十時近くになると、皆な上機嫌で歸つて行つた。あとに殘つたのは葉山夫婦許であつた。お種はお時の洗物の手傳をした。葉山は柳之助と道子を前に置いて、將來のことや經濟

向のことなど懇々と説いた。而してお互ひに仲好く契を結んで呉れ、喧嘩なんぞを持つて來ても一切俺の方では引き受けないからなどと、例の洒落を盛に饒舌つて、十時半頃お種と一所に歸つて行つた。

お時は疲れて眠むさうな眼をして居るので、戸閉りをさせてから直に臥床に就かせた。それから二人は、此の夜の寢室と極められた、二階の間に上つて行つた。

「道子さん。一寸寢床を捲くつて下さい。」

是が柳之助の、新婚の妻に與へた最初の一言であつた。

道子は嫌な顔をして寢床を捲つた。而して默つて良人に面して坐つた。

柳之助は可也酒氣を帶んで居たが、何だか情の昂奮しない、沈んだ樣な顔をして居た。而して煙草許り無暗に喫した。

彼は美しい新婚の妻を眼前に見ながら、心の中では、死んだお類と結婚の當夜のことや、此の夜の光景を淋びしい顔で視て行つたお種のことや、五日程あとに斷りの手紙を送つた榮子の身の上などを想つて居た。

懷しい過去の追懷と堪へ難い現在の悲哀とが、彼の胸に食ひ入つて麻の樣に亂れた。彼は什うかして、此の亂れた思ひを排ひ退けて、渾身の愛をば、たゞ新婚の妻の身の上にのみ灑ぎたいと考へた。而して彼はお種や榮子に似た美しい道子の顔を見て愛を喚び起さうと努力した。嘗つて聞いたヴイオリンの音を耳に聽いて愛を動かさうと努力した。けれども彼の情の底に沸く泉の水は、矢張り暖かではなかつた。

「貴郎！何かお氣に召さないことが御座いますか？」

道子は堪へ切れずと云ふ樣な、すこし癇の籠つた聲で柳之助に詰問した。而して催涙んだ眼を向けて其の顔を佶と視た。

柳之助は夢からでも醒めた樣に、ほつとなつて道子の顔を見返したが、

「そんな……そんな事はない……。」

恁う言つて又口を噤んだ。

道子は皓い前齒で下唇をキッと嚙んだ。而して暗い穴の中へでも突き落された樣な氣がした。どうして大神宮などへ行つて、あんな謹嚴な式を擧げたらうとも思つた。而して神に欺かれた樣な氣がした。

性格を飲み込む迄は、隨分氣拙いこともあらうが、それを辛棒しなくつてはいけない――恁う葉山から呉れ〳〵も注意されて來た道子ではあるが、一生を彩るべき歡樂の第一夜が、豈夫恁んな水臭い冷たい良人の仕打に葬られて行かうとは、今の今まで思つては居らなかつた。道子は泣いても叫んでも、その口惜しさの遣場がない樣な氣がした。出來るものなら、今から直ぐに逃げて行きたい樣な氣もした。背後に黑い魔の神が潜んで居て、その毒手に繰れて居る樣な氣もした。天地の有ゆる不幸を獨で脊負つた樣にも思へた。而して此の冬葉山の二階で會食した時、情熱の溢れた眼を向けて、自分のヴァイオリンを賞めた人は、こんな冷たい、こんな水臭い人であらうとは、自分は思はなかつた、夢にも思はなかつた。何の爲めに好いヴィオリンなどを、わざ〳〵買つて持つて來たのだらう。自分は恁んな情の冷かな良人に、聞いて貰ふ心算で持つて來たのではない。明日になつたら打ち碎いて焚いて了はう――道子は恁んなことまで堀り起して、悲しみ慨いたのであつた。

道子は遂ひに泣き伏して了つた。

柳之助は大罪でも犯した樣な氣持になつて、眤ッと水も滴る許りの美しい島田の戰慄するのを瞋めたが、突然起つて道子の體を抱き上げながら、

「道子さん！何故泣くのだ。何故泣くのだ。お前は誤解しとるよ……誤解しとるよ。僕は恁んな性格の人間だと云ふことを、葉山から聞いとる筈だ……泣いちやいかん……。」

と、吃りながら言つた。

「もう……もう私は……什うでも好う御座いますわ。放つて置いて

下さい……放つて置いて……。」

道子は泣き聲を揚げた。そして身を戰はして、柳之助の體から離れやうと藻掻いた。

柳之助は、此の物音を下のお時に聞かれたら什うしやう。而して明日葉山に告げられたら什うしやう、自分は什んな顏をもつて吩疏しやう——柳之助は其のことを非常に恐れた。彼は在るにも在られぬ焦燥した氣になつて、いろ〳〵に慰めてはみたが、道子の泣聲は決して止まなかつた。

怨恨の情に炎えて居る道子の體から、熱い血の匂が柳之助の胸に通つた。彼は急に道子の心の中を測度つて、堪へ難い氣の毒さを感じた。種種な樂しい今夜の光景を想像して嫁いで來た女が、其の良人に恁んな澁い顏を、冷かな待遇をされたら、道子でなくとも誰でも悲しいだらう、口惜しいだらう。自分は惡い。自分は惡い——彼は不圖、今日の日比谷の大神宮のことを思ひ起した。而して重い濁つた聲で讀んだ神官の誓文を、神々しい感に打たれながら聞いたことを思ひ出した。彼は其の時、たしかに道子を愛さう、全力をあげて愛さねばならぬ——恁う神の前で誓つたことをも思ひ出した。そして現在の打つて變つた胸の中を顧みて非常に恐れた。彼は此の恐れの念を何時までも〳〵心に持續させて置きたいと思つた。そして道子を愛さねばならぬ。恁うも思つた。

華かに美しく、而して甘い歡樂の密に醉ふべき新婚の寢室の夜が、恁うした絶望、怨恨、冷淡、悲哀などの滿ちた空氣のうちに深けて行つた。

（二十五）

明くる朝は、二人は蒼い顏をして床を離れた。道子の眼は赤く血が浸んで居た。

二人は食卓に對して拙づさうに飯を食つた。それでも昨夜とは違つた、

和な言葉を交はした。

お時は不思議な顔をして、絶えず二人の身に注意の眼を注いで居る。

食事が濟むと間もなく、

「ちよつと他處へ出て來るから、洋服を出して下さい。」

柳之助は恁う道子に言つた。

道子は頷いて、箪笥から縞の脊廣を出して柳之助に着換へさせた。

柳之助が外へ出て行つてから、道子は日當の好い二階に上つて、昨夜の光景や、將來のことなどに思ひ耽けつた。

今朝の道子は、もう何と言つても取り返しの出來ない身となつて居た。彼は夜が明けたら、思ひ切つて葉山へ行つて打ち開けやう、而して事に依つたら、それつきり此の家へは還つて來まい――さう決心して昨夜は床に就いたが、今朝は最う、其の決心を敢えて辛棒しなければならぬ、或る恐しい力の爲に壓されて、什うすることも出來ない身の上であつた。

「性格を飲み込む迄は、氣拙いだらうが、それを辛棒しなくつちやいけない。」

道子は唯、葉山に言はれた此の言葉を一心になつて、考へた。そして自分は、其の言葉のうちに生存しなければならない人なんだ。良人は彼云ふ性格なんだ。自分を嫌つたのではない。段々月日が經つて行くうちには、佶度平和な光が輝いて來るだらう。自分はそれを樂に待つて居やう。決して良人を恨むのではない――道子は恁う諦めて、すこしは胸の動搖も收るのであつたが、それが稍もすると、惡夢に襲はれた樣な昨夜の印象で打ち消されて、吁々一生一度の歡樂は悲哀と恐怖とで明けて了つた。此の悲哀と恐怖は一生を通じて自分の身に貧緣つて行きはすまいか。それを思ふと何だか心細い。情ない。口惜しい。淋びしい。事そ今のうちに暇を貰つて了はうか、而して再婚が出來ないならば、一生音樂の教授でもやつて、獨身で暮しても管はない――恁んな氣にもなるので

あつた。而して暗い前途を想ふて泣きたい樣な氣もしたのである。

道子は又恁う云ふ大膽な決烈なことも思つた。如何して暮すも儚ない一生である。良人が自分に冷かであつたら、自分も亦良人に冷かで酬ゆやう。寧そ積極的の態度をしてやらう。毎日勝手放題な擧動をして、打たれても蹴られても、一生こびり附いて良人を麻折てやらう――

道子は種々な思ひに迷つて居た。

お晝過にはお種が樣子を見に來た。そして何だか蒼い顏をして、淋しさうに自分を迎へた道子を見て、

「什うかしたのかい……。」と心配さうに訊いた。

「什うもしないけれど、何だか變な人だわねえ。」道子は言つた。

「でも、貴婦は何時か、驚見さんは實がありさうよと言つたぢやないの……今からそんなことを思つちや駄目ですよ。」

お種は苦笑した。

道子は此の從姉に、もすこし詳しく昨夕の樣子を打ち開けたいと思つたけれど、言へば兄樣の耳にも入る、折角心配して下すつたものを、氣の毒をかけては濟まない、恁う思つて、其の話は含めにして了つた。

それから茶を飲みながら、種々な世間噺に時を移して、僅に道子は氣を間切らした。

お種が歸つてから、道子は自分で持つて來た箪笥の中や、道具類などの仕末を附けた。而して客間の押入を啓けた時、茶櫃の陰になつて、何だか非常に大きな新聞包があつた。包の上には麻繩が十文字にかけられて、結び目の處に紙を封じてあつた。

秘密！見ては惡いもの――道子は直ぐに然う思つた。而して明けて見たい樣な氣がした。けれども明けたら惡いだらうとも思つた。彼は小間く此の二つの思ひを鬪はして居たが、良人は妻に對して何も秘密はない筈である、なに開けて見ても差し支へない――ひよつこり恁んな氣を起

して、道子は不思其の封目を切つて了つた。

開いて見ると、それは竪三尺に横二尺の例のお類の油繪と、外に二枚の寫眞であつた。一枚の寫眞は保を連れたお種の立姿で、裏に、「一生を通じて忘れ得ざる人の面影」と書いてあつた。他の一枚は藝妓の寫眞で、裏には「松葉屋榮子、戀しき檀那樣へ」と金釘流に書いてあつた。道子はこの油繪のことは、豫ねて葉山からもお種からも、所由因緣を聞かされて、又自分でもそれを承知で來たのだから、一眼見て唯だ悲しい樣な哀れなやうな感じを起しただけであつた。又榮子の寫眞については、何も男の常のことゝ嫌やな氣がしただけですまされた。道子には此の油繪と榮子の寫眞に秘密の封をかけた、良人の心は讀めたが、讀めないのはお種の寫眞であつた。

道子はお種の寫眞を手にとつて眤ッと見詰めた。而して又裏を返して、「一生を通じて忘れ得ざる人の面影。」と書いてある、其の怪しい文句を、口の中で何遍も〳〵も讀んだ。道子は夢に夢見る樣な心地になつて、其の文句の意味を考へ初めた時、玄關に靴の音が聞えて、柳之助は歸つて來た。

道子はハッと思つて、慌てゝ寫眞を押し入れの中へ放り附ける樣に入れた。が、もう遲かつた。柳之助の眼には、明瞭にお類の油繪を見られたのであつた。

柳之助は顏色を變へ、恐しい眼付をして、

「何をするのだ……誰の許しを得て……此の卦を……卦を切つたのだ……。」

と嚙み附く樣に道子を叱つた。

道子は眞蒼になつて、默つて俯向いたが、

「今物を整理して居ましたけれど、恁んなものがありますので、ついあけて見たので御座います。」

「整理と云つて、卦までしてあるものを、勝手に然う啓けて見ると云ふ法はなからう。」

柳之助は猶も息を喘せて、言つた。

道子の眼尻が、急に神經的にピクリ〳〵動いた。と思ふと彼は頗る大膽な態度で、

「どうせ油繪と寫眞だけで御座いませう。開けて見たからつて、何も其樣にお怒りなさらなくつても好いぢやありませんか。よしんばそれが、秘密であつたところで、私は貴郎の妻ですから、然う良人の爲めに、秘密にされる所由はなからうと思ひますわ。」

恁う良人の言葉に反抗した。而してもう什うでも好い、怒るなら怒つて御覽なさいと云つた樣な風情をした。

「もう宜しい。お前が其樣氣なら、何とでも勝手にするが好い……。」

柳之助は荒々しく押入を啓けた。そしてお類の油繪は元の通り新聞に包んで、再び茶櫃の陰へ收め、お種と榮子の寫眞は、ポケットに入れたまゝ、ぐん〳〵二階へ上つて行つた。

道子は良人の後姿を、恨めしさうに見詰めたが、其の眼には涙が浸んで居た。

新婚の二日目も亦、恁んな悲慘な空氣の中に暮れて行つた。

三日目の夜になると赤い顏をした葉山が、例の大元氣でやつて來た。

「什うだい。新婚の味は……堪らなく好かろう。しかし餘り好過ぎても困るよ。二人の體が鎔けて了つちや大變だからな。」

葉山は黑文字を使ひながら柳之助に言つた。

柳之助は苦笑して、

「然うでもないさ……。」

「おや〳〵平素の筆法だな。しかし生活が改まつたら、其の筆法も自づと改めなくつちや非だね……新妻君を傍に置いて、餘り御挨拶だよ。」

葉山は笑つたが、

「ね。奥様　然うぢやないか。」

と道子の顔に眼を注いだ。

「如何ですか。私には解りませんわ。」

道子は淋びし氣に微笑した。

「是はしたり、檀那も檀那なら、奥様も奥様だな。幾何夫婦でも、然う無愛嬌の一心同體は恐れるね。」

葉山は恁う言つて大に笑つたが、何だか二人の樣子が變だと思つた。見れば柳之助の顔も、平素に增して憂鬱であるし、いつも晴々して居る筈の道子の顔色も何だか惡く、其の上眼も泣き腫した樣に赤く充血して居るので、そして二人の一体の態度には、すこしも新婚の樂しさが輝いて見えないので——

葉山は新婚早々困つたものだと思つた。そして心配で〳〵堪らなかつ

た。が、今言つては至極拙い。折を見てお時でも呼び出して聞いてみやう。又一夜明けたら二人の樣子が變つて、けろりとして居るかも知れない、夫婦の間は七面鳥の顔と同じで、日に七度化ると云ふから——葉山は腹の中で恁んなことを思つた。而して新婚の夜に氣拙い思ひをしてはいけぬと、驚見にも道子にも、嚙んで含める樣に注意して置たから、豈夫喧嘩をしたのでもあるまい。其樣も思つた。

道子は、一寸とした肴で葉山に酒を出した。葉山は其の深切の酒も、平素程うまくはなかつたが、夫れでも外面は美味さうに飲んだ。而して盛に串談を言つて、二人を笑はせた。

「君が來ると、何時も家の中が春風が吹いとる樣だな。什うかして僕も君の樣な性格になりたい……。」

柳之助は葉山に猪口を献しながら言つた。

「……と言つても、是ばかりは親から讓られた無形財產だから、今更ど

うすることも出來ぬが、境遇の變化で、或程度までは改まらせることが出來る。君も今度の新婚で、少々許り改めたら什うだい。又道子さんも然うだ。一旦此の人を良人と仰いだ上は、自分の方から盛に愛嬌を振り撒いて、そして良人を愛嬌責にしてやるのさ。さうすると如何な無愛嬌な驚見でも、段々道子さんに感化――いや感化はおかしい。まあ同化する樣になるのだね。何と言つても世の中は愛嬌のことさ、愛嬌は要り莞爾〳〵を意味する、笑ふ門には福來るの理窟さ。」

葉山は恁んなことを言つて、十時半頃歸つて行つた。

此の夜二人が床へ就いた時、つい先程迄物を餘り言はなかつた柳之助が、不思議に優しい調子で、

「道子さん。お前は昨日の寫眞を見て、何か疑つとるだらう……。」

と道子の寢顏を見ながら言つた。

「疑るつて、私は何もそんなことを思つちや居ませんわ……。」

道子も軟な調子で應へた。

「さうか。それぢや宜い。しかしね、彼の時分はたゞくわつと腹が立つて。お前を怒つたのだが、それは僕の氣質だから、氣にかけちやいかんよ。」

道子は嘻しさうな眼附で良人の顏を見た。そして今夜に限つて、什うして此んなに優しいことを言ふのだらう――恁う思ふと、何かしらず自分でも優しくなりたい樣な氣もしたので、

「えゝ。氣になんかかけませんわ。ですけれど、彼の時は、貴郎が餘り荒い聲で、私をお叱りなさるもんだから、私も一時氣が立つて、不知失禮なことを言ひましたわ。惡う御座いました……。」

道子は恁う言つたが什うかして此の機會から、良人の優しい心を末永く續かせたいものだと思つた。良人が若し明日から自分を優しくして呉れるならば、昨日見た良人の秘密や、新婚の夜の悲しかつた口惜しかつ

た感情などは、此の儘昔の夢に葬つて了つても好いとさへ思つた。そして何だか良人に對する愛情が胸に沸いて來た樣な氣がした。

（二十六）

明くる朝は二人は機嫌よく床を離れた。そして顏色も好かつた。けれども話しには實がのつて居なかつた。

それから半月程は、氣の拔けたビーヤの樣な生活をした。道子は齒痒い樣に思つた。柳之助も自烈たい樣な氣がした。其の中に道子には我儘が芽を吹き出して來た。柳之助は澁い顏をした。二人は口論をした。柳之助は何時でも道子の快辯に屈服させられた。そして道子はその口論の起る度毎、

「葉山の兄樣に來て頂いて、貴郎が無理か、私が無理か、裁いて貰ひませう……。」

恁う云ふことを口癖の樣に言つた。柳之助は其の言葉を、自分の大嫌な、見た許りでも悚然とする墓よりも恐れた。

柳之助は道子に恁う言はれた其の日から、不思議にも優しい言葉を道子にかけた。道子も亦良人に優しくした。日が經てば又二人は口論をした。

或る日柳之助は、久し振で榮子から手紙を貰つた。其の手紙には、美しい方と結婚されたさうだが、それは貴郎の薄情からでなく、みんな葉山さんの差し入れに違ひない。私は決して貴郎を恨みはしない。恨みはしないけれど、悲しくつて毎日毎夜泣いて居る。私はもう彼云ふ望は遂げられない體と諦めたから、決して心配して下さるな。其の代り薄命な私を助けると思つて、折々慰めに來て頂きたい。私は貴郎に會いたくつて〳〵堪らない。此の頃は毎晩夢にまで見て居る。飛んでも行きたいけれど、じつと辛棒して居る。辛棒するのは非常に怨襟い。どうぞ〳〵お

暇の時分に來て下さい。一生のお願ひだから、若し來て下さらないと、私は死んで祟ります――恁んな熱烈な意味の文句が並べてあつた。

柳之助は是を讀んだ時、何だか榮子の懷に誘き入れらるゝ樣に感じた。そして浸み〴〵哀れだと思つて涙を滾した。

それ以來、柳之助は、道子と口論をした折や、口論はしなくとも、道子に澁い顏をされた折などは、友人へ行つたとか、學校に調物があつて夜業したとか、そんなことを道子に言つて、榮子の元で夜を深して歸つた。そして、自分は何時になつたら、眞心から道子を愛することになるだらう、何時になつたら、道子は眞心から自分を愛して呉れるだらう――柳之助は恁う思つた。そして榮子の强い〴〵キッスの味を、靈藥か何その樣に思つて居る。（完）

後の多情多恨　終

大正元年十二月十二日印刷
大正元年十二月十五日發行

（後の多情多恨）
實價金九拾五錢

著作者　關莊一郎
東京市神田區五軒町十八番地

發行者　下田兵太郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者　水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　博文館印刷所
東京市神田區五軒町十八番地

發行所　有文堂
振替口座東京貳參七番

不許複製

329
160

44

東京

有文堂

藏版

329
160

終